『三体詩』における七言絶句の分類

『三体詩』においては、七言絶句を、①実接、②虚接、③用事、④前対、⑤後対、⑥拗体に分類して説明している。このうち、

③用事…故事、典姑を用いたところに特徴がある物
④前対…起句と承句が対句をなすもの
⑤後対…転句と結句が対句をなすもの
⑥拗体…平仄が外れたところに特徴をなすもの

と分かり易いが、作詩の上で重要な物は①実接と②虚接である。これらにおいては，転句に注目し、転句が実、すなわち、実体のあるもの（景物）を述べている場合（典型的には写景）を①実接、転句が虚、すなわち実態のないもの（情思・作者の思い、感情）を述べているものを②虚接と呼んでいる。

私見ではあるが、転句で客観性のある事を述べているのが実接、主観的なことを述べているのが虚接に近いように思われる。

一般的に、起句、承句では客観性のあることを述べるのが多いようであるので、②虚接の場合は転句での転換が自然に行われるのに対し、①実接では、描写が「実」の世界で連続するので、転句での転換の仕方に注目すると、各詩の特徴が分かり易いと思われる。

実接

華清宮　華清宮

杜常

行盡江南數十程　行き尽くす　江南　数十程
曉星殘月入華清　暁星　残月　華清に入る
朝元閣上西風急　朝元閣　上　西風急なり
都入長楊作雨聲　都て長楊に入りて　雨声と作る

【語釈】
○華清宮…陝西省臨潼県の驪山の麓にあった宮殿。○江南…長江の下流南岸の地域。○数十程…数十日。○朝元閣…華清宮にある宮殿の名。

宮詞　宮詞

王建

金殿當頭紫閣重　金殿　当頭　紫閣重なり
仙人掌上玉芙蓉　仙人掌　上　玉　芙蓉
太平天子朝元日　太平の天子　朝元の日
五色雲車駕六龍　五色の雲車　六龍に駕す

【語釈】
○金殿…宮殿の美称。○當頭…頭の上。○紫閣…宮城の門。○仙人掌…承露盤（不老長寿の露を受ける盤）を持つ仙人の像。○玉芙蓉…承露盤の形容。○太平天子…玄宗。○朝元日…元日。○五色雲車…五色の雲で飾った車。○六龍…六頭の馬。天子の御車を曳く。

吳姫　　吳姫（ごき）　　薛能（せつのう）

自是三千第一名　　自ら是れ（おのずか）三千　第一の名

内家叢裏獨分明　　内家叢裏（ないけそうり）に　独（ひと）り分明（ぶんめい）

芙蓉殿上中元日　　芙蓉殿上（ふようてんじょう）　中元の日

水拍銀臺弄化生　　水は銀台を拍（う）ちて　化生（かせい）を弄（ろう）す

【語釈】

○呉姫…呉地方（現在の江蘇省一帯）には美女が多いとされる。○三千…宮女の数。第一名…一番の美女。○内家叢裏…内家は、後宮のこと、叢は、むらがる。○分明…目立つの意。○芙蓉殿…長安の東南、曲江の畔にあった離宮。○中元日…陰暦七月十五日。○化生…蝋を以て嬰児を作り、水に浮かべる遊び。

歸雁　　帰雁（きがん）　　錢起（せんき）

瀟湘何事等閑回　　瀟湘（しょうしょう）より何事ぞ　等閑（とうかん）に回える
水碧沙明兩岸苔　　水　碧（みどり）にして　沙（いさご）　明かなり　両岸の苔
二十五弦彈夜月　　二十五弦　夜月（やげつ）に弾ずれば
不勝清怨却飛來　　清怨（せいえん）に勝（た）えずして　却って飛び来たらん

【語釈】
○瀟湘…瀟水と湘江。洞庭湖に南から流れこむ二つの川の名、ここでは、この二つの川の流域一帯を指す。○何事…どういうわけで。等閑…心にかけない。○水碧…水は青く澄んで。○沙明…砂は白く輝いて。○両岸苔…両方の岸にはみずみずしい苔が生じている。○二十五絃…二十五弦の瑟（おおごと）。○清怨…清らかで哀怨な調べ。清く哀れな音。不勝…堪えきれず。○却飛来…南方の瀟湘から北方へ飛び帰ること。「来」は助辞、意味はない。

（唐詩選）

逢賈島　賈島に逢う

張籍（ちょうせき）

僧房逢着欵冬花　僧房に逢着す　欵冬花（ぎとうか）
出寺行吟日已斜　寺を出て行吟（こうぎん）すれば　日は已に斜なり
十二街中春雪遍　十二街中　春雪　遍（あまね）し
馬蹄今去入誰家　馬蹄　今去りて　誰が家にか入（い）る

【語釈】
○賈島…中唐の詩人。「推敲」で名高い。○逢着…ばったり会う、「着」は助辞。○欵冬…ふきの類。○十二街…長安城の街道。

江南春　江南の春

杜牧（とぼく）

千里鶯啼緑映紅　千里　鶯　啼（な）いて　緑　紅に映ず
水村山郭酒旗風　水村　山郭　酒旗（しゅき）の風
南朝四百八十寺　南朝　四百八十寺（よんひゃくはっしんじ）
多少樓臺煙雨中　多少の楼台　煙雨の中（うち）

【語釈】
江南…長江下流の南側の地方。水村…水辺の村、山郭…山沿いの聚落の外周の建物。酒旗…酒屋の看板になっている旗、青色。南朝…四二〇年～五八九年の間に、江南の地に興った六朝（呉、東晋、宋、斉、梁、陳）の中の宋、斉、梁、陳の四王朝で、建康（南京）を首都とした。多少…多くの。煙雨…霧雨。
（新釈漢文大系　詩人編　9）

別李浦之京　李浦の京に之くに別る

王昌齢

故園今在灞陵西　故園 今 灞陵の西に在り
江畔逢君醉不迷　江畔 君に逢いて 酔えども迷わず
小弟鄰莊尚漁獵　小弟は鄰莊に 尚お漁猟せん
一封書寄數行啼　一封の書は寄す 数行の啼

【語 釈】

○李浦…人名。未詳。○京…長安の都。○故園…ふるさと。○灞陵…漢の文帝の陵墓。長安の東南校外にある。○江畔…川のほとり。○江は長江を指す。○醉不迷…酒を飲んでも酔えない意。○小弟…おとうと。○鄰莊…別荘の隣。○漁獵…魚を捕って遊ぶ。

題崔處士林亭　崔処士が林亭に題す

王維

綠樹重陰蓋四鄰　緑樹の重陰 四鄰を蓋い
青苔日厚自無塵　青苔 日に厚く 自ら塵無し
科頭箕踞長松下　科頭にして箕踞す 長松の下
白眼看他世上人　白眼にて 他の世上の人を看る

○崔処士…不祥。處士は官に使えないで民間にいる人。○重陰…深い影。四鄰…あたり。○青苔…青色の苔。○科頭…冠や頭巾をかぶらないむき出しの頭。○箕踞…両足を投げ出して座ること。○長松…隠者の隠語。○白眼…阮籍の故事に基づく、気に入らない俗物を見る目（他の世上の人にはそうであったので、尋ねて行った王維・盧象・裴迪・王縉には青眼で見た。）

（唐詩選）（新釈漢文大系　詩人編　3）

楓橋夜泊　　楓橋夜泊（ふうきょうやはく）

張繼（ちょうけい）

月落烏啼霜滿天　　月落ち　烏啼いて　霜　天に満つ
江楓漁火對愁眠　　江楓（こうふう）　漁火　愁眠（しゅうみん）に対す
姑蘇城外寒山寺　　姑蘇城外（こそじょうがい）の寒山寺（かんざんじ）
夜半鐘聲到客船　　夜半の鐘声（しょうせい）　客船（かくせん）に到る

【語釈】
○楓橋…中国蘇州にある運河にかかった太鼓橋。○霜満天…霜の下りる気配が天に満ちること。○江楓…川沿いの楓の木々。漁火…漁船のいさり火。愁眠…旅愁を抱いてウトウトしながらたまに目が覚める浅い眠り。姑蘇…蘇州の旧名。春秋時代の呉の都。寒山寺…蘇州郊外西五キロの楓橋鎮にある、臨済宗の寺。（唐詩選）

贈殷亮　　殷亮（いんりょう）に贈る

戴叔倫（たいしゅくりん）

日日河邊見水流　　日々河辺に　水の流るるを見る
傷春未已復悲秋　　春を傷むこと　未（や）だ已まずして　復（ま）た秋を悲しむ
山中舊宅無人住　　山中の旧宅　人の住む無く
來往風塵共白頭　　風塵（ふうじん）に来往して　共に白頭

【語釈】
○殷亮…人名、不詳。○河邊…川のほとり。○舊宅…かっての住まい。○來往…行ったり来たり、うろうろすること。○風塵…けがれた俗世間。○白頭…白髪頭、年をとったことを示す常用語。

湘南即事　　湘南即事

戴叔倫

盧橘花開楓葉衰　　盧橘（ろきつ）花開いて　楓葉（ふうよう）衰う
出門何處望京師　　門を出（い）で　何れの処にか京師（けいし）を望まん
沅湘日夜東流去　　沅湘（げんしょう）　日夜　東に流れ去り
不爲愁人住少時　　愁人（しゅうじん）の為に少時（しょうじ）も住（とど）まらず

【語釈】
○湘南…湖南省湘潭県の西。○即事…その場の事を詠じた詩。○盧橘…金柑。○楓葉…楓の葉。○出門…城門を出ることで、郊外へ行く意。○京師…帝都、長安。○沅湘…沅江と湘江、共に湖南省を流れて洞庭湖に注ぐ川の名。○愁人…愁いを抱く人。

送齊山人歸長白山　　斉山人（せいさんじん）が長白山（ちょうはくざん）に帰るを送る

韓翃（かんこう）

舊事仙人白兔公　　旧事の仙人　白兔公（はくとこう）
掉頭歸去又乘風　　頭（こうべ）を掉（ふる）って帰り去り　又風に乗る
柴門流水依然在　　柴門の流水　依然として在り
一路寒山萬木中　　一路寒山　満木の中（うち）

【語釈】
○齊山人…未詳、山人は世を捨てて山に隠れ住む人。○白兔公…仙人の名。○掉頭…頭をふる、事柄を否定するさま○。歸去…ふるさとに帰る。○柴門…しばで作った門。○寒山…秋から冬にかけてのさびしい山、さむざむとした山。○萬木…きわめて多くの木々。

送元使君自楚移越

露冕行春向若耶
野人懐惠欲移家
東風二月淮陰郡
唯見棠梨一樹花

元使君が楚より越に移るを送る

劉商

冕を露し春に行りて若耶に向う
野人恵に懐きて家を移さんと欲す
東風二月淮陰郡
唯見る棠梨一樹の花

【語釈】
○元使君…不祥。使君は刺史のこと。起句は後漢の郭賀の故事。○若耶…浙江省紹興市。（越）○懐恵…統治者の恩恵にあずかる。○東風…春風。○淮陰郡…江蘇省淮安市（楚）。

竹枝詞 其四

十二峰頭月欲低
空聴灘上子規啼
孤舟一夜東歸客
泣向東風憶建溪

竹枝詞 其四

李渉

十二峰頭 月 低れんと欲し
空聴灘上 子規啼く
孤舟一夜 東帰の客
泣いて 東風に向って 建溪を憶う

【語釈】
○竹枝詞…劉禹錫が始めた物で、地方の民謡、風俗などを七言絶句の形で詠った物。○十二峰…巫山の十二峰。○空聴灘…不祥。○建溪…福建省を流れる川。

杏山館聽子規

楚塞餘春聽漸稀
斷猿今夕讓霑衣
雲埋老樹空山裏
髣髴千聲一度飛

杏山館に子規を聽く

寳常

楚塞の余春に 聽くこと漸く稀なり
斷猿 今夕 衣を霑すを讓る
雲は老樹を埋ずむ 空山の裏
千声に髣髴として 一度に飛ぶ

【語釈】
○杏山…河南省信陽市にある山。○楚塞…楚(湖南省・湖北省)一帯。○餘春…晩春。○漸…だんだんと、次第次第に。○断猿…孤独で悲壮な猿の鳴き声。○空山…人気の無い寂しい山。○髣髴…ぼんやり見えるさま。

長慶春

徐凝

山頭水色薄籠煙
遠客新愁長慶年
身上五勞仍病酒
夭桃窗下背花眠

長慶の春

山頭の水色 薄く煙を籠む
遠客 新たに愁う 長慶の年
身上の五労は 仍お酒を病み
夭桃窓下 花に背にいて眠る

【語釈】
○長慶…唐の穆宗の年号。○煙…水上の靄。○遠客…故郷を遠く離れた旅人。○五勞…五臓の労。○夭桃…みずみずしく美しい桃の花。

宮詞　宮詞（きゅうし）　王建（おうけん）

金吾除夜進儺名　金吾 除夜に 儺名（だんめい）を進め
畫袴朱衣四隊行　画袴（がこ） 朱衣（しゅい） 四隊（めぐ） 行る
院院燒燈如白日　院々 灯を焼いて 白日の如し
沈香火底坐吹笙　沈香火底（じんこうかてい）に 坐して笙を吹く

【語釈】
○宮詞…宮廷のことを詠った詩。○金吾…執金吾、首都警備隊長。○儺名…おにやらいを行う人の名簿。○畫袴朱衣…綺麗な袴と朱色の衣。○院院…家家。○沈香火底…沈香（香木の一種）が燃える傍ら。

秋夕　秋夕（しゅうせき）　王建（おうけん）（杜牧）

銀燭秋光冷畫屏　銀燭 秋光 画屏（がへい）に冷やかなり
輕羅小扇撲流螢　軽羅（けいら）の小扇（しょうせん） 流螢（りゅうけい）を撲（う）つ
天階夜色涼如水　天階の夜色 涼しくして水の如し
臥看牽牛織女星　臥（ふ）して看る 牽牛・織女星

【語釈】
○銀燭…白いロウソク。○秋光…秋の景色。○畫屏…絵が描かれている屏風。○輕羅小扇…薄絹を張った軽やかなおうぎ。○流螢…飛び交うホタル。○天階…宮中のきざはし。○夜色…夜の景色。
（唐詩三百首）

城西訪友人別墅

澧水橋西小路斜
日高猶未到君家
村園門巷多相似
處處春風枳殼花

城西に友人の別墅を訪ぬ　雍陶
澧水橋西　小路斜めなり
日高くして　猶お未だ　君の家に到らず
村園　門巷　多くは相い似たり
処々の春風　枳殼の花

【語釈】
○城西…城郭の西。○別墅…別荘。○澧水…湖南省に源を発し，洞庭湖に注ぐ川。○村園…むらざと。○門巷…門とちまた。○處處…あちらこちら。○枳殼花…からたちの花。

貴池縣亭子　杜牧

勢比凌敵宋武臺
分明百里遠帆開
蜀江雪浪西江滿
強半春寒去却來

貴池県の亭子　杜牧
勢は凌敵　宋武の台に比し
分明に百里　遠帆開く
蜀江の雪浪　西江に満つ
強半の春寒　去りて却って来たる

【語釈】
○貴池縣亭…安徽省池州市の貴池亭。○凌敵宋武臺…安徽省黄山に六朝の宋の武帝が築いた楼台。○分明…はっきりと。○雪浪…雪解け水。○西江…長江の中下流。○強半…大半。○春寒…春のうすら寒さ。

送隱者　隱者を送る　杜牧

無媒徑路草蕭蕭　無媒の経路　草蕭々
自古雲林遠市朝　古　自り雲林　市朝に遠ざかる
公道世間唯白髮　世間に公道たるは　唯だ白髮
貴人頭上不曾饒　貴人の頭上にも　曾て饒さず

【語釈】
○無媒…人里離れた寂しい所。○逕路…こみち。○蕭々…ものさびしいさま。草がゆれうごくさま。○雲林…隱者の住む処。雲のたちこめる山深き林の中。○市朝…人のおおぜい集まる場所。○公道…公平な。○貴人…身分の高い人。○不曾…決して～しない。○不曾饒…ゆるさない、貴人の頭も白髮となる。（新釈漢文大系　詩人編　9）

送宋處士歸山　宋処士が山に帰るを送る　許渾

賣藥修琴歸去遲　薬を売り　琴を修め　帰り去ること遅し
山風吹盡桂花枝　山風　吹き尽くす　桂花の枝
世間甲子須臾事　世間の甲子　須臾の事
逢著仙人莫看棋　仙人に逢着するに　棋を看ること莫かれ

【語釈】
○宋處士…不祥。處士は官職についていない人。○甲子…歳月。○結句…『述異記』の故事。樵が山に入ると、童子が碁を打っており、棗のような物をくれたので、口に含んでいると、何時までも空腹を感じず、一局の碁が終わらないうちに斧の木が腐っていた。

秋思　秋思（しゅうし）　許渾（きょこん）

琪樹西風枕簟秋　琪樹（きじゅ）の西風　枕簟（ちんてん）の秋
楚雲湘水憶同遊　楚雲（そうん）　湘水（しょうすい）　同遊（どうゆう）を憶う
高歌一曲掩明鏡　高歌一曲　明鏡を掩（おお）う
昨日少年今白頭　昨日の少年　今は白頭

【語釈】
○琪樹…美しい木々、琪は玉の名。○西風…秋風。枕簟…枕と簟（竹で編んだむしろ）、転じて夏の寝具。○楚雲…楚の空に浮かぶ雲、楚は、湖北・湖南省一帯を指す。○湘水…湘江。○同遊…昔いっしょに遊んだ友人。憶…思い出す。○高歌一曲…声高らかに一節ひとふし歌うこと。（唐詩選）

黄陵廟　黄陵廟（こうりょうびょう）　李羣玉（りぐんぎょく）

黄陵廟前莎草春　黄陵廟前（こうりょうびょうぜん）　莎草（さそう）の春
黄陵女兒茜裙新　黄陵の女兒　茜裙（せんくん）新たなり
輕舟短棹唱歌去　軽舟（けいしゅう）　短棹（たんとう）　歌を唱いて去る
水遠山長愁殺人　水は遠く　山は長く　人を愁殺（しゅうさつ）す

【語釈】
○黄陵廟…湖南省湘陰県の北にある。舜の二妃（娥皇・女英）を祭る。○莎草…はますげ。カヤツリグサ科の多年草。○茜裙…茜色の裳裾（もすそ）。○輕舟…小舟。○短棹…舟を操る短い棹。○愁殺…ひどく悲しませる。憂鬱にさせる。殺は、強意の助字。

贈彈箏人　箏を彈く人に贈る

温庭筠

天寶年中事玉皇　天宝年中　玉皇に事え
曾將新曲教寧王　曽て　新曲を将って　寧王に教ゆ
鈿蟬金雁皆零落　鈿蟬　金雁　皆　零落し
一曲伊州淚萬行　一曲の伊州に　涙　万行

【語釈】
○天寶年中…玄宗の時代の年号（七四二～七五六年）。○玉皇…皇帝、玄宗。○李憲…玄宗の兄李憲。○鈿蟬…蟬をかたどった螺鈿の琴の飾り。○金雁…雁に似た金の琴柱。○零落…落ちぶれる。○伊州…伊州曲、北地の哀音を奏でる。

韋曲　韋曲

唐彦謙

欲寫愁腸愧不才　愁腸を写さんと欲して　不才を愧ず
多情練漉已低摧　多情　練漉して　已に低摧す
窮郊二月初離別　窮郊　二月　初めて離別し
獨倚寒村嗅野梅　独り寒村に倚りて　野梅を嗅ぐ

【語釈】
○韋曲…長安の南の地名。○愁腸…愁い悲しむ心。○練漉…尽くす。○低摧…労瘁したさま。○窮郊…荒涼とした野原。○結句…晉の王羲之が、騒乱に際して、毎日花の香りを嗅ぐばかりで無言に過ごした故事。

曲江春望　曲江の春望

唐彦謙（とうげんけん）

杏豔桃嬌奪晩霞　杏豔桃嬌（きょうえんおうきょう）晩霞（ばんか）を奪う
樂遊無廟有年華　楽遊（らくゆう）廟（びょう）無く　年華有り
漢朝冠蓋皆陵墓　漢朝の冠蓋（かんがい）　皆　陵墓
十里宜春下苑花　十里の宜春　下苑の花

【語釈】
○曲江…長安の南西にある池。○春望…春の眺め。杏豔…杏の艶やかさ。○桃嬌…桃の嬌態。○晩霞…落日の輝き。○樂遊無廟…宣帝の楽遊廟は無くなっている。○年華…春の景色。○冠蓋…貴人高官。○宜春…宜春苑、曲江のあったところにあった漢代の宮苑。

鄴宮　鄴宮（ぎょうきゅう）

陸龜蒙（りくきもう）

花飛蝶駭不愁人　花飛び　蝶　駭（おどろ）きて　人を愁えしめず
水殿雲廊別置春　水殿　雲廊（うんろう）　別に春を置く
曉日靚妝千騎女　曉日（ぎょうじつ）　靚妝（せいしょう）す　千騎の女
白櫻桃下紫綸巾　白桜桃下（はくおうとうか）　紫綸巾（しきんりん）

【語釈】
○鄴宮…鄴京（河南省臨漳県）の宮殿、魏の曹操が建てた。○水殿雲廊…殿廊を飾る水と雲の絵。○曉日…夜明け。○靚妝…美しく着飾る。○千騎の女…石李龍が千騎の女を従えたという故事『鄴中記』。○紫綸巾…紫の頭巾を被り千騎の女が遊ぶ様子。

閔郷ト居　　吳融

六載抽毫侍禁闈　　六載 毫を抽きて禁闈に侍す
可堪衰病決然歸　　衰病に堪うべけんや 決然として帰る
五陵年少如相問　　五陵の年少 如し相問わば
阿對泉頭一布衣　　阿対泉頭の一布衣

【語釈】
○閔郷…河南省臨漳県。○卜居…家を建てる。○六載…六年。○抽毫…筆を執る。○禁闈…宮城の門、翰韻院のこと。○五陵…ここでは長安。○年少…若い官吏。○阿對泉…閔郷にある泉。○布衣…庶民。

尤溪道中　　韓偓

水自潺湲日自斜　　水は自ずから潺湲として 日は 自 ら斜めなり
盡無雞犬有鳴鴉　　尽く雞犬無く 鳴鴉有り
千村萬落如寒食　　千村万落 寒食の如し
不見人煙空見花　　人煙を見ず 空しく花を見る

【語釈】
○尤溪…中国福建省三明市の県。○潺湲…水がさらさらと流れるようす。○盡無雞犬…にわとりや犬がまったくいない、軍隊が通過したあとの惨状を表している。○千村万落…多くの村落。寒食…冬至の日から数えて百五日目の日のこと、この日を挟んで三日間は火を断ち、煮たきしないで冷たい物を食べる風習があった。○人煙…人家から立ちのぼる炊事の煙。

丹陽送韋參軍

丹陽に韋參軍を送る　　嚴維

丹陽郭裏送行舟　　丹陽郭裏　行舟を送る

一別心知兩地秋　　一別して　心は知る　両地の秋

日晩江南望江北　　日晩れて　江南より　江北を望めば

寒鴉飛盡水悠悠　　寒鴉　飛び尽くして　水悠々たり

【語釈】

○丹陽…江蘇省鎮江市。○韋參軍…不詳、參軍は、武官の官位名。○郭裏…郭は、城郭。○心知…心が自然と知ること。江南望江北…江は、長江。長江の南より遥か北の方角を見る。○寒鴉…冬のからす。○悠悠…遠くはるかなさま。

寒食

寒食　　韓翃

春城無處不飛花　　春城　処として　花の飛ばざるは無く

寒食東風御柳斜　　寒食　東風　御柳　斜めなり

日暮漢宮傳蠟燭　　日暮　漢宮より　蠟燭を伝え

青煙散入五侯家　　青煙　散じて入る　五侯の家

【語釈】

○寒食…冬至から百五日目にあたる日の前後三日間は、火をたくことが禁じられ、冷たいものを食べる。○春城…春の都市。○東風…春風。○御柳…宮中のヤナギ。○漢宮…漢王朝の宮殿、漢代に借りて、同時代（唐代）の宮中。五侯…時の権力者、諸侯を謂う、公・侯・伯・子・男の五等の臣を指す。（唐詩選）

上陽宮　　上陽宮（じょうようきゅう）　　竇庠（とうしょう）

愁雲漠漠草離離　　愁雲は漠々（ばくばく）　草は離々（りり）
太掖句陳處處疑　　太掖か句陳（こうちん）か　処々に疑う
薄暮毀垣春雨裏　　薄暮　毀垣（きえん）　春雨の裏（うち）
殘花猶發萬年枝　　残花（ざんか）　猶（ひら）お発く　万年の枝

【語釈】
○上陽宮…現在の河南省洛陽市の西に唐の高宗が建てた宮殿。○愁雲…さびしき雲。○漠漠…連なっているさま、うす暗いさま。○離離…草木が生茂っているさま。○太掖…太掖池、池のなまえ。○勾陳…星の名前、星の名前を冠した宮殿の名。○處處…あちらこちら。○毀垣…破りくずれた垣根。殘花…散りゆく花。○萬年枝…冬青樹。

贈楊煉師　　楊煉師に贈る　　鮑溶（ほうよう）

紫煙衣上繡春雲　　紫煙衣上（しえんいじょう）に　春雲を繡（ぬ）う
清隱山書小篆文　　清隱（せいいん）の山書　小篆（しょうてん）の文
明月在天將鳳管　　明月　天に在りて　鳳管（ほうかん）を将（も）って
夜深吹向玉晨君　　夜深く　吹いて　玉晨君（ぎょくしんくん）に向う

【語釈】
○楊煉師…不祥。煉師は戦術を学ぶ者への尊称。○紫煙衣…紫の霞模様の衣。○繡春雲…春雲の刺繍を施す。○清隱…道士。○山書…道書。○小篆…秦の時代に流行った字体。○鳳管…管楽器の美称。○玉晨君…道教の始祖である太上大道玉晨君。

和孫明府懐舊山　　雍陶

五柳先生本在山
偶然爲客落人間
秋來見月多歸思
自起開籠放白鵰

孫明府の旧山を懐うに和す

五柳先生本山に在り
偶然客と為りて人間に落つ
秋来月を見て帰思多なり
自ら起って籠を開き白鵰を放つ

【語釈】
○孫明府…未詳、明府は県令の尊称。○五柳先生…陶淵明、ここでは孫明府。○爲客…客は旅人。○人間…俗世間。○秋來…秋になる。○歸思…本いた山に帰りたいという思い。○白鵰…キジ科の鳥。

贈日東鑒禪師　　鄭谷

故國無心渡海潮
老禪方丈倚中條
夜深雨絶松堂靜
一點山螢照寂寥

日東の鑑禅師に贈る

故国無心にして海潮を渡り
老禅の方丈中條に倚る
夜深くして雨絶え松堂静かなり
一点の山螢寂寥を照らす

【語釈】
○日東…日本。○鑒禪師…鑑禅師、日本人僧侶の名。○方丈…僧の居室。○中條…中條山、長安と洛陽の中間にある。○松堂…松林の中にある堂。○寂寥…ひっそりとして物寂しいさま

旅懐　旅懐（りょかい）

杜荀鶴（とじゅんかく）

月華星彩坐來收　月華星彩（げっかせいさい）　坐来りて収まる
嶽色江聲暗結愁　岳色　江声　暗く愁いを結ぶ
半夜燈前十年事　半夜　灯前　十年の事
一時和雨到心頭　一時の和雨　心頭に到る

【語釈】
○旅懐…旅の思い。○月華星彩…月と星。○坐來…坐っていると、來は助字。○嶽色…山の色、山の気配。○江聲…川の音。○半夜…真夜中。○和雨…細雨。○心頭…心。

寄別朱拾遺　朱拾遺（しゅしゅうい）に寄別（きべつ）す

劉長卿（りゅうちょうけい）

天書遠召滄浪客　天書　遠く召す　滄浪（そうろう）の客（かく）
幾度臨岐病未能　幾度（いくたび）か岐（き）に臨み　病んで未だ能（あた）わず
江海茫茫春欲遍　江海　茫々（ぼうぼう）として　春　遍（あまね）からんと欲す
行人一騎發金陵　行人　一騎　金陵を発す

【語釈】
○朱拾遺…不祥。○天書…詔書。○滄浪客…屈原のように追放されている者。○茫茫…大きいさま。○行人…旅人。○金陵…南京。

題張道士山居　張道士の山居に題す

秦系

盤石垂蘿即是家　盤石 垂蘿 即ち是れ家
回頭猶看五枝花　頭を回らして 猶お看る 五枝の花
松間寂寂無煙火　松間 寂々 煙火無し
應服朝來一片霞　応に朝来 一片の霞を服すべし

【語釈】
○張道士…不祥。○盤石…大岩。○垂蘿…垂れ下がるかずら。○五枝花…仙家にのみ生じるもの、『山海経』。○寂寂…寂しく静かなさま。○應…「まさに～すべし」と読み、「きっと～に違いない」の意。○朝來…朝から。

寄李渤　李渤に寄す

張籍

五度溪頭躑躅紅　五度溪頭 躑躅紅なり
嵩陽寺裏講時鐘　嵩陽寺裏 講時の鐘
春山處處行應好　春山処々 行けば 応に好かるべし
一月看花到幾峰　一月 花を看て 幾峰にか到る

【語釈】
○李渤…洛陽人、科挙に合格しなかったが太子賓客となった。崇山の小室山に隠棲した。○五度溪…崇山にある渓。○躑躅…つつじ。○嵩陽寺…崇山にある寺。

南荘春晩　　南荘の春晩

李羣玉（りぐんぎょく）

草暖沙長望去舟　　草暖かに　沙長（いさごなが）くして　去舟を望めば
微茫煙浪向巴丘　　微茫（びぼう）たる煙浪　巴丘（はきゅう）に向う
沅湘寂寂春歸盡　　沅湘（げんしょう）　寂々（せきせき）　春　帰えり尽き
水緑蘋香人自愁　　水は緑にして　蘋（ひん）は香（かんば）しく　人自ずから愁う

【語釈】
○沙…砂浜。○去舟…去りゆく舟。○微茫…かすかでぼんやりしているさま。○巴丘…湖南省岳陽府。○沅湘…沅江と湘江が流れる一帯。○寂寂…寂しく静かなさま。○春歸…春が過ぎ去る。○蘋…浮き草。

長溪秋思　　長溪の秋思

唐彦謙（とうげんけん）

柳短莎長溪水流　　柳は短かく莎（さ）は長くして　溪水流る
雨微煙暝立溪頭　　雨は微（かす）かに　煙は暝（くら）くして　溪頭に立つ
寒鴉閃閃前山去　　寒鴉（かんあ）　閃々（せんせん）として　前山（ぜんざん）に去り
杜曲黄昏獨自愁　　杜曲（ときょく）　黄昏　独り自ら愁う

【語釈】
○莎…はますげ。○煙…靄。○寒鴉…秋から冬にかけての烏。○閃閃…きらきら。○杜曲…西安の地名。○黄昏…たそがれ。

隋宮　　隋宮（ずいきゅう）　鮑溶（ほうよう）

柳塘煙起日西斜　　柳塘（りゅうとう）　煙起こりて　日は西に斜めなり
竹浦風迴鴈弄沙　　竹浦（ちくほ）　風迴（めぐ）りて　鴈（がん）　沙を弄（ろう）す
煬帝春遊古城在　　煬帝（ようだい）の春遊　古城在り
壞宮芳草滿人家　　壞宮（かいきゅう）の芳草（ほうそう）　人家に滿つ

【語　釈】

○隋宮…長安より揚州に渡る隋堤沿いに煬帝が造営した四十余所ある離宮のこと。○柳塘…隋堤のこと。多くの柳が植えられた。○烟起…もやが生じる。竹浦…揚州の竹西（地名）あたりの川辺。○煬帝…隋二代皇帝。○古城…いにしえの城。○壞宮…こわれた宮殿。隋宮こと。

綺岫宮　　綺岫宮（きしゅうきゅう）　王建（おうけん）

玉樓傾側粉牆空　　玉樓（ぎょくろう）　傾側（けいそく）して粉牆（ふんしょう）空し
重疊青山遶故宮　　重疊（ちょうじょう）たる青山　故宮を遶（めぐ）る
武帝去來羅袖盡　　武帝去りて来（よ）り　羅袖（らしゅう）尽き
野花黃蝶領春風　　野花（やか）　黄蝶（こうちょう）　春風を領（りょう）す

【語釈】

○綺岫宮…長安の東の驪山もあった離宮。○玉樓…宮殿の楼閣。○傾側…傾く。○粉牆…土塀。○重疊…幾重にも重なる。○武帝…漢の武帝をいうが、ここでは玄宗。○羅袖…後宮の美女。

送三蔵歸西天國　送三蔵の西天国に帰るを贈る

李洞（りどう）

十萬里程多少難　十万の里程　多少の難
沙中彈舌授降龍　沙中（さちゅう）　舌を弾じ　降龍（こうりゅう）に授（さず）く
五天到日應頭白　五天　到る日　応（まさ）に　頭（こうべ）白かるべし
月落長安半夜鐘　月は落つ　長安　半夜の鐘

【語釈】
○三蔵…「経、律、論」三つに通じた法師。○西天国…西域。インド。○沙中…砂漠の中。彈舌…口に仏教の呪文を唱える。○降龍…砂漠に棲息する蛮族の酋長。○五天…インドのこと。○半夜…真夜中。

長信秋詞

王昌齡（おうしょうれい）

奉帚平明金殿開　帚（そう）を平明に奉ずれば　金殿開く
且將團扇共裴徊　且（しばら）く団扇（だんせん）を将（も）って共に裴徊（はいかい）せん
玉顔不及寒鴉色　玉顔（ぎょくがん）は及ばず　寒鴉（かんあ）の色の
猶帶昭陽日影來　猶（しょうよう）お昭陽の日影を帯びて来たるに

【語釈】
○長信秋詞…漢の班婕妤になぞらえて失寵の怨みを詠った歌。○奉帚…箒で宮殿をそうじする意。○平明…夜明け。○金殿…ここでは長信宮。○玉顔…美しい顔。○寒鴉…秋から冬にかけての烏。○昭陽昭陽殿のこと。漢の武帝が建てた、宮女の住む御殿。ここでは、趙飛燕姉妹の住居。○日影…日光、ここでは天子の恩寵を指す。　・一来…言葉の調子をととのえるために附ける。

呉城覧古

呉王舊國水煙空
香徑無人蘭葉紅
春色似憐歌舞地
年年先發館娃宮

呉城覧古（ごじょうらんこ）　陳羽（ちんう）

呉王の旧国　水煙　空し
香経（こうけい）　人無く　蘭葉（らんよう）　紅なり
春色は歌舞の地を　憐（あわれ）むに似て
年々先ず発（ひら）く　館娃宮（かんあきゅう）

【語釈】
○呉城…春秋時代の呉の都。江蘇省蘇州市。○覧古…古跡を尋ねて当時の面影を偲ぶ。○呉王…夫差のこと。○水煙…川の上に立つ靄。○香徑…採香径、夫差が香草、香木を植え、西施と楽游したところ。○春色…春景色、春の気配。○館娃宮…呉の宮殿、夫差が西施の為に建てた。

江南意　江南の意（おもい）

閑向江邊採白蘋
還隨女伴賽江神
衆中不敢分明語
暗擲金錢卜遠人

江南の意（おもい）　于鵠（うこく）

閑（しずか）に　江辺に向いて　白蘋（はくひん）を採る
還（ま）た　女伴（じょはん）に従って　江神（こうしん）に賽（さい）す
衆中　敢えて　分明に語らず
暗（ひそ）かに　金銭を　擲（なげう）ちて　遠人を卜（ぼく）す

【語釈】
○江南…長江中下流の南岸地方。○白蘋…白い浮き草。○女伴…女性の友連れ。○江神…伝説中の水の神。○分明…はっきりと。○遠人…遠く離れている人。○（安否を）占う。

閑情　閑情（かんじょう）

孟遲（もうち）

山上有山歸不得　山上 山有り 帰るを得ず
湘江暮雨鷓鴣飛　湘江（しょうこう）の暮雨 鷓鴣（しゃこ）飛ぶ
蘼蕪亦是王孫草　蘼蕪（びぶ） 亦た是れ 王孫草（おうそんそう）ならば
莫送春香入客衣　春香を送りて 客衣（かくい）に入るること莫かれ

【語釈】
○閑情…妻が遠くにいる夫のことを思う情。○湘江…洞庭湖に注ぐ湖南省最大的の川。○鷓鴣…鳴き声が「行不得」と聞こえるので、行く事ができない事を意味する。○蘼蕪…川岸に生じる草で当帰草（当に帰るべし）という。○王孫草…「楚辞・招隠詩」の「王孫遊不歸兮春草生萋萋」に基づく。○客衣…旅の衣。

曲江春草　曲江の春草（きょくこう しゅんそう）

鄭谷（ていこく）

花落江堤蔟暖煙　花落つ江堤 暖煙 蔟（むらが）る
雨餘草色遠相連　雨余の草色 遠く相連（あいつら）なる
香輪莫輾青青破　香輪 青々を輾（きし）り破ること莫かれ
留與遊人一醉眠　遊人に留与して 一たび酔眠せしめん

【語釈】
○曲江…長安の南西にある池。○暖煙…暖かい靄。○雨餘…雨上がり。○香輪…車の美称。○青青…青々とした草原。○留与…留めおいて与える。○遊人…遊ぶ人。○醉眠…酔って寝る。

山路見花　山路に花を見る

唐　崔櫓

曉紅輕拆露香新　曉紅（ぎょうこう）　軽く拆（ひら）いて　露香新たなり
獨立空山冷笑春　独り空山に立ちて　春を冷笑す
春意自知無主惜　春意　自（おのずか）ら主の惜しむこと無きを知り
恣風吹逐馬蹄塵　恣（ほしいまま）に風吹いて　馬蹄（ばてい）の塵を逐う

【語釈】
○曉紅…曉の紅色の花。○拆…發、開く。○空山…葉が落ちて人気の無い山。春意…春ののどかな気持。

逢入京使　逢京に入る使（つかい）に逢（あ）う

岑參（しんじん）

故園東望路漫漫　故園（こえん）　東に望めば　路　漫々（まんまん）
雙袖龍鍾淚不乾　双袖（そうしゅう）　龍鍾（りゅうしょう）として　涙　乾かず
馬上相逢無紙筆　馬上に相逢（あいお）うて　紙筆（しひつ）無し
憑君傳語報平安　君に憑（よ）りて　伝語して　平安を報ぜん

【語釈】
○故園…ふるさと，住むべき地、長安。○漫漫…路が長々と続いているさま。○雙袖…両袖○龍鐘…失意のさま。涙を流すさま。○相逢…に出逢う、…に（偶然に）出くわす。○憑…たのむ。○傳語…言伝（ことづて）する。○報…知らせる。○平安…無事。
（唐詩選）

送客之上黨

官柳青青匹馬嘶
迴風暮雨入銅鞮
佳期別在春山裏
應是人參五葉齊

客の上登に之くを送る

韓翃

官柳　青々として　匹馬　嘶く
迴風　暮雨　銅鞮に入る
佳期　別に春山の裏に在り
応に是れ　人参五葉斉しかるべし

【語釈】
○上黨…山西省長治市。○官柳…官府に植えられた柳。○迴風…旋風。○銅鞮…上黨にある地名。○人参…上黨は人参の名産地。○五葉…人参の葉は五枚ある。○齊…整う。

病中遣妓

萬事傷心在目前
一身憔悴對花眠
黃金用盡教歌舞
留與他人樂少年

病中に妓を遣る

司空曙

万事　心を傷ましむること　目前に在り
一身　憔悴して　花に対して眠る
黄金　用い尽くして　歌舞を教え
他人に留与して　少年を楽しましむ

【語釈】
○妓…家妓、愛妾。○遣…解放する。○憔悴…疲れ苦しむ。○留與…留めておいて与える。

華清宮　華清宮（かせいきゅう）　王建（おうけん）

酒幔高樓一百家　酒幔（しゅまん）　高樓　一百家（いっぴゃくか）
宮前楊柳寺前花　宮前の楊柳　寺前の花
内園分得溫湯水　内園　温湯（おんとう）の水を分かち得て
二月中旬已進瓜　二月中旬　已に瓜を進む

【語釈】
○華清宮…陝西省臨潼県の驪山の麓にあった宮殿。○酒幔…酒宴を開くとき、四方を蔽う膜。○寺…大常寺、内務省、文科省に当たる。○分得溫湯水…一つの出口の温泉を方々に分かつ。○結句…温泉を利用しているので、瓜が育つのが早いという意味。

宣州開元寺　宣州開元寺（せんしゅうかいげんじ）　杜牧（とぼく）

松寺曾同一鶴棲　松寺（しょうじ）　曽（かつ）て　一鶴（いっかく）と同（とも）に棲（す）む
夜深臺殿月高低　夜深けて　台殿　月　高低
何人爲倚東樓柱　何人の為か倚らん　東楼の柱
正是千山雪漲溪　正に是れ　千山　雪　溪に漲ぎる

【語釈】
○宣州開元寺…安徽省宣城市宣州区にある寺。玄宗が各州に建てた日本の国分寺にあたるもの。○松寺…松林の中にある寺。臺殿…高楼。

山行　山行（さんこう）　杜牧（とぼく）

遠上寒山石徑斜　遠く寒山（かんざん）に上れば 石経斜めなり
白雲生處有人家　白雲生ずる処 人家有り
停車坐愛楓林晚　車を停（とど）めて 坐（そぞ）ろに愛す 楓林（ふうりん）の晩（くれ）
霜葉紅於二月花　霜葉（そうよう）は 二月の花よりも紅なり

【語釈】
○寒山…秋から冬にかけての、さむざむとした山。○石径…石の多い小道。坐…何となく。○愛…鑑賞する。○楓林…紅葉林。○霜葉…霜にうたれて紅葉した葉。○於…A～於B」の形で「AはBより（も）～（なり）」と読み、「AはBよりも～だ」と訳す。○二月花…桃の花を指す。（新釈漢文大系　詩人編　9）

寄山僧　山僧に寄す　張喬（ちょうきょう）

大道本來無所染　大道（だいどう）は 本来 所染（しょせん）無し
白雲那得有心期　白雲 那（なん）ぞ 心期（しんき）有るを得ん
遠公獨刻蓮花漏　遠公（えんこう） 独り 蓮花漏（れんかろう）を刻（こく）し
猶向空山禮六時　猶お空山に向いて 六時（りくじ）に礼す

【語釈】
○大道…釈迦の説く道。○所染…清浄ではないこと。○心期…心に期すもの、意思。○遠公…晉の高僧 慧遠、 廬山の東林寺に住んだ。○蓮花漏…蓮の花の形のある時計。○六時…昼、夜をそれぞれ三分した時刻。

寄人

酷憐風月爲多情
還到春時別恨生
倚柱尋思倍惆悵
一場春夢不分明

人に寄す

張偓

酷だ風月を憐むは 多情なるが為なり
還た春時に到り 別恨生ず
柱に倚り尋思すれば 倍ます 惆 悵たり
一 場の春夢 分明ならず

【語釈】

○多情…心に感じる事が多い。○到春時…春の季節になる。○別恨…別れを怨む気持。○尋思…心を沈めて思考する。○惆悵…嘆き悲しむ。○一場春夢…その場だけで跡かたもなく消える短い春の夢。○分明…はっきりする。

過南鄰花園

莫怪頻過有酒家
多情長是惜年華
春風堪賞還堪恨
纔見開花又落花

南鄰の花園を過ぐ

雍陶

怪しむ莫かれ 頻りに酒有る家に過ぎるを
多情は長く是れ 年華を惜しむ
春風は賞するに堪え還た恨むに堪えたり
纔に開花を見しに 又落花

【語釈】

○南鄰…南どなり。○多情…心に感じる事が多い。○年華…年月。

宮詞　宮詞（きゅうし）　杜牧（とぼく）

監宮引出暫開門　監宮（かんきゅう）　引き出でて　暫（しばら）く門を開く
隨例須朝不是恩　例に隨って須（すべか）らく朝すべし　是れ恩にあらず
銀鑰却收金鎖合　銀鑰（ぎんやく）　却って收めて　金鎖（きんさ）　合す
月明花落又黄昏　月明かに花落ちて　又　黄昏

【語釈】
○宮詞…宮廷のことを詠った詩。○監宮…女官長。○引出…出入りを監督する。○朝…皇帝に謁見する。○不是恩…天子の恩寵によるものではない。○銀鑰…銀の鍵。○金鎖…金の錠。○黄昏…たそがれ。

漢江　漢江（かんこう）　杜牧（とぼく）

溶溶漾漾白鷗飛　溶々（よう you）　漾々　白鷗（はくおう）飛ぶ
綠淨春深好染衣　緑淨く春深くして衣を染むるに好し
南去北來人自老　南去北来　人自ら老ゆ
夕陽長送釣船歸　夕陽　長く送る　釣船の帰るを

【語釈】
○漢江…陝西省西部に源を発し、東に流れ、武漢で長江に注ぐ。○溶溶…水がこんこんとたたえているさま。○漾漾…水面がゆらゆら揺れているさま。○南去北來…南へ行ったり、北へ行ったりすること。
（新釈漢文大系　詩人編　9）

寄維揚故人　維揚の故人に寄す　張喬

離別河邊綰柳條　離別 河辺に 柳條を綰ぶ
千山萬水玉人遙　千山万水 玉人遙かなり
月明記得相尋處　月明かにして 記し得たり 相尋ねし処
城鎖東風十五橋　城は東風を鎖ざす 十五橋

【語釈】
○維揚…揚州。○故人…古くからの知り合い。○綰柳條…柳の枝を輪にして首にかける。「輪」が「還」に通ず。○玉人…故人のこと。○十五橋…揚州にかかる多くの橋、普通は二十四橋という。

逢友人之上都　友人の上都に之くに逢う　法振

玉帛徵賢楚客稀　玉帛 賢を徴して 楚客稀なり
猨啼相送武陵歸　猿啼き相送りて 武陵より帰る
湖頭望入桃花去　湖頭の望は桃花に入りて去る
一片春帆帶雨飛　一片の春帆 雨を帯びて飛ぶ

【語釈】
○上都…長安。○玉帛…朝廷よりの召状。○楚客稀…皇帝が優れているので、屈原のような楚人がいない。野に賢なし。○武陵…湖南省常徳市。○湖頭…波の頂点。○春帆…春の帆掛け船。

山中　　顧況

野人自愛山中宿　　野人　自ら愛す　山中の宿
況是葛洪丹井西　　況や是れ　葛洪　丹井の西なるをや
庭前有箇長松樹　　庭前　箇の　長松　樹有り
夜半子規來上啼　　夜半　子規　来り上りて啼く

【語釈】
○山中…浙江省紹興市雲門寺。○野人…田舎者、作者のこと。○葛洪…東晋の道家、煉丹術家。○丹井…仙薬丹を寝るのに使った井戸。

酬曹侍御過象縣見寄　　柳宗元

破額山前碧玉流　　破額山前　碧玉の流れ
騷人遙駐木蘭舟　　騷人　遙かに駐む　木蘭の舟
春風無限瀟湘意　　春風　無限なり　瀟湘の意
欲採蘋花不自由　　蘋花を採らんとするも　自由ならず

【語釈】
○侍禦…侍御史、皇帝の側に使える役人。○象縣…広西壮族自治区象州県。○破額山…象県の中の柳江のほとりにある山。○碧玉…清く青く澄んでいる喩え。○騷人…屈原をはじめとする『楚辞』の世界の人、曹侍御をいう。○遥駐…象縣と柳州は、５０km ほど離れている。○木蘭舟…木欄で作った船、船の美称。○瀟湘…湘水と瀟水の合流しているところ，洞庭湖の南。○瀟湘意…曹侍御に逢いたいのだが果たせないこと。○蘋花…浮き草の一種の花。（柳宗元詩集）

宿武關　武関に宿る

李渉

遠別秦城萬里遊　遠く秦城に別れて 万里に遊ぶ
亂山高下入商州　乱山 高下し 商州に入る
關門不鎖寒溪水　関門鎖さず 寒溪の水
一夜潺湲送客愁　一夜 潺湲として 客愁を送る

【語釈】
○武關…陝西省商県。春秋時代に関所があった。○秦城…長安。○商州…陝西省商県。○關門不鎖…秦の照王が楚の懐王を招いておきながら関を閉ざして帰らせなかった故事。○潺湲…浅い水の流れるさま。さらさら。○客愁…旅愁。

題開聖寺　開聖寺に題す

李渉

宿雨初收草木濃　宿雨 初めて収まり 草木濃し
羣鴉飛散下堂鍾　群鴉 飛散す 下堂の鍾
長廊無事僧歸院　長廊 事無く 僧は院に帰る
盡日門前獨看松　尽日 門前に 独り松を看る

【語釈】
○開聖寺…未詳。○宿雨…前日からの雨、連日の雨。○羣鴉…からすの群れ。○下堂鐘…礼拝の終わりを告げる鐘。○下堂…堂からおりること。○院…僧の住むところ。○盡日…終日。獨看松…松は、樹齢が長く葉の色を変えないので、節操・長寿の象徴とされる。高潔な人の代名詞。

宿虚白堂　虚白堂に宿る

李郢

秋月斜明虚白堂　秋月 斜めに明かなり 虚白堂
寒蛩唧唧樹蒼蒼　寒蛩 唧々 樹蒼々
江風徹曉不得寐　江風 曉に徹し 寐るを得ず
二十五聲秋點長　二十五声 秋点長し

【語釈】
○虚白堂…浙江省杭州市虚白堂。○寒蛩…晩秋のコオロギ。○唧唧…虫の声の形容。○蒼蒼…草木などの青く茂るさま。○二十五声…一夜を二十五に分けた二十五番目の時計の音、曉にあたる。○秋點…秋の時計の音。

晴景　晴景

王駕

雨前初見花間葉　雨前 初めて見る 花間の葉
雨後兼無葉裏花　雨後 兼ねて 葉裏の花 無し
蛺蝶飛來過墻去　蛺蝶 飛び来たり 墻を過ぎて去る
却疑春色在鄰家　却って疑う 春色は鄰家に在るかと

【語釈】
○蛺蝶…蝶々。○春色…春の気配。春の景色。

社日　　社日

王駕

鵝湖山下稲粱肥　　鵝湖山下　稲粱肥ゆ
豚柵雞塒半掩扉　　豚柵　雞塒　半ば扉を掩う
桑柘影斜秋社散　　桑柘　影斜めにして　秋社散じ
家家扶得醉人歸　　家々　酔人を扶け得て帰る

【語釈】
○社日…土地神を祀る日。立春後第五の戊の日を春社、立秋後第五の戊の日を秋社という。○鵝湖山…江西省鉛山県にある山。○稲粱肥…晩秋の豊作をいう。粱は穀物。○豚穽…豚を飼っているところ。穽は、穴。豚は坑で飼われていた。○鷄塒…鷄を飼っているところ。塒は、鳥のねぐら。○桑柘…桑の木。○影斜…夕暮れ。

自河西歸山　　河西自り山に帰る

司空図

水闊風驚去路危　　水闊く　風驚きて　去路危うし
孤舟欲上更遲遲　　孤舟　上らんと欲して　更に遅々たり
鶴羣長遶三珠樹　　鶴群　長く遶る　三珠の樹
不借人間一隻騎　　人間に一隻を借りて　騎せしめず

【語釈】
○河西…甘粛省武威市。○去路…帰る途中の道路。行く手の道路。○孤舟…一つの小舟。○三珠樹…伝説中の珍木。回りには鶴が飛んでいて、仙人を載せるという。雁をこの鶴になぞらえて結句に繋げる。○一隻…舟を雁、鶴になぞらえている。

野塘　野塘（やとう）　韓偓（かんあく）

侵曉乘涼偶獨來　曉を侵し 涼に乘じて 偶（たま）たま独り来る
不因魚躍見萍開　魚の躍るに因らずして 萍（ひょう）の開くを見る
卷荷忽被微風觸　卷荷（けんか） 忽ち微風に触れられ
瀉下清香露一杯　瀉（そそ）ぎ下す 清香の露一杯

【語釈】
○野塘…野原の中の池。侵曉…明け方。○乘涼…納涼する。乘は便乘の乘。○萍…浮き草。○卷荷…巻いている蓮の葉。

歳初喜皇甫侍御至　歳初（さいしょ）に 皇甫侍御（こうほじぎょ）が至るを喜ぶ　嚴維

湖上新正逢故人　湖上 新正に 故人に逢う
情深應不笑家貧　情深く 応（まさ）に家の貧（まず）しきを笑わざるべし
明朝別後門還掩　明朝 別後 門還（ま）た掩（おお）わば
修竹千竿一老身　修竹（しゅうちく） 千竿（せんかん） 一老身

【語釈】
○歳初…正月。○皇甫侍御…皇甫曾、侍御史は官名で官吏の非違を取り締まる役。○湖上…湖のほとり。○新正…年の初め。○脩竹…すっきり延びた竹。○千竿…沢山の竹。

送魏十六還蘇州　　魏十六が蘇州に還るを送る

皇甫冉

秋夜沈沈此送君　　秋夜 沈沈 此に君を送る
陰蟲切切不堪聞　　陰虫 切々 聞くに堪えず
歸舟明日毗陵道　　帰舟 明日 毗陵の道
迴首姑蘇是白雲　　首を迴らせば 姑蘇 是れ白雲

【語釈】
○魏十六…未詳、十六は排行。○清夜…ひっそりとした夜。○沈沈…静まりひっそりとしたさま。○陰蛩…ひそかに鳴くこおろぎ。○切切…悲しいさま。○毘陵…現在の江蘇省常州市。○回首…ふりかえり見ること。○姑蘇…現在の江蘇省蘇州市。（唐詩選）

送王永　　王永を送る

劉商

君去春山誰共遊　　君去らば 春山 誰と共にか遊ばん
鳥啼花落水空流　　鳥啼き 花落ちて 水は空しく流る
如今送別臨溪水　　如今 送別し 溪水に臨む
他日相思來水頭　　他日 相思い 水頭に来たらん

【語釈】
○王永…人名、不詳。○如今…ただいま。臨…面する。溪水…谷川の水。○他日…後日。○相思…思いを寄せる。○水頭…川のほとり。

酬楊八副使將赴湖南途中見寄　　楊八副使が湖南に赴いて寄せらるるに酬ゆ

劉禹錫

知逐征南冠楚材　　知る 征南を逐いて 楚材に冠たるを
遠勞書信到陽臺　　遠く 書信を労して 陽台に到らしむ
明朝若上君山望　　明朝 若し 君山に上りて望まば
一道巴江自此來　　一道の巴江 此自り来たらん

【語釈】

○楊八副使…不祥。○湖南…湖南省。○征南…青南将軍。○楚材…逸材。○陽臺…三峡にある山で、楚の荘王と巫山の巫女との会合の地。夔州刺史であった劉禹錫の居場所。○君山…洞庭湖の中にある名山。○巴江…長江の三峡のあたり。

逢鄭三遊山　　鄭三の山に遊ぶに逢う

盧仝

相逢之處草茸茸　　相逢うの処 草茸々
石壁攢峰千萬重　　石壁 攢峰 千万重
他日期君何處好　　他日 君を期すに 何れの処か好からん
寒流石上一株松　　寒流 石上 一株の松

【語 釈】

○鄭三…未詳。三は、排行。○茸茸…草がさかんに生い茂るさま。○峭壁…切り立ったけわしいがけ。○攢峰…いくつも集まり重なっている山なみ。○千萬重…多くの山々が重なるさまをいう。○他日期君…別の日に再会する約束をする。○寒流…つめたい流れ。

重贈商玲瓏兼寄樂天　重ねて商玲瓏に贈り兼ねて楽天に寄す

元稹

休遣玲瓏唱我辭　玲瓏をして我が辞を唱わしるを休めよ
我辞多是寄君詞　我が辞　多く是れ　君に　詞を寄す
明朝又向江頭別　明朝　又江頭に向いて別かれ
月落潮平是去時　月落ち　潮平らかなるは　是れ去る時

【語釈】

○商玲瓏…妓女の名。○樂天…白居易。○江頭…川辺。

採松花　松花を採る

姚合

擬服松花無處學　松花を服せんと擬して　学ぶに処無し
嵩陽道士忽相教　嵩陽の道士　忽ち　相教う
今朝試上高枝採　今朝　試みに　高枝に上りて採れば
不覺傾翻仙鶴巣　覚えず　仙鶴の巣を傾翻するを

【語釈】

○松花…松の花。仙薬としての用法があった。○嵩陽…崇山、洛陽の南にある。五嶽の一つ。○仙鶴…鶴。○傾翻…ひっくり返す。

哭孟寂　孟寂を哭す

張籍

曲江院裏題名處　曲江の院裏 名を題する処
十九人中最少年　十九人中 最少年
今日春光君不見　今日 春光 君を見ず
杏花零落寺門前　杏花 零落す 寺門の前

【語釈】
○孟寂…不詳、進士合格同期生？。○曲江院裏…慈恩寺、科挙及第者は，曲江で宴を開き、慈恩寺大雁塔に名を記する習慣があった。○風光…景色。○零落…凋んで落ちる。

患眼　眼を患う

張籍

三年患眼今年較　三年眼を患らい 今年較ゆ
免與風光便隔生　風光と 便ち 生を隔つるを免がる
昨日韓家後園裏　昨日 韓家 後園の裏
看花猶自未分明　花を看るに 猶 自ら 未だ分明ならず

【語釈】
○風光…景色。○韓家…韓愈の家？〔張籍は韓愈の弟子であった〕。○文明…はっきりしたさま。

感春　春を感ず

張籍（ちょうせき）

遠客悠悠任病身　遠客（えんかく） 悠々（ゆうゆう） 病身に任す
誰家池上又逢春　誰（た）が家の池上にか 又春に逢う
明年各自東西去　明年 各自 東西に去り
此地看花是別人　此の地に花を看るは 是れ別人

【語釈】
○遠客…故郷を遠く離れた旅人。○悠悠…うれえるさま。○池上…池のほとり。

西歸出斜谷　西に帰って斜谷を出ず

雍陶（ようとう）

行過險棧出褒斜　険棧（けんさん）を行き過ぎて 褒斜（ほうしゃ）を出ず
出盡平川似到家　平川を出で尽くせば 家に到るに似たり
無限客愁今日散　限り無き客愁 今日（こんにち）散じ
馬前初見米囊花　馬前 初めて見る 米囊花（べいのうか）

【語釈】
○斜谷…褒谷。長安から蜀への道。○險棧…険しい桟橋。蜀の桟道。○褒斜…褒斜谷。○平川…広々とした平らかなところ。○客愁…旅の愁い。○米囊花…芥子の花。蜀の地に多かった。

宿陵館驛　嘉陵駅に宿す　雍陶

離思茫茫正値秋　離思 茫々 正に秋に値う
毎因風景卻生愁　風景に因る毎に 卻って愁を生ず
今宵難作刀州夢　今宵 作し難し 刀州の夢
月色江聲共一樓　月色 江声 共に一樓

【語釈】
○嘉陵驛…嘉陵江（四川省を北から南に縦断し、重慶で長江に注ぐ川）にある宿場。○離思…遠い故郷を偲ぶ気持。○茫茫…果てしなく広いさま。○値…会う。○因…親しむ。○刀州…四川省広元県。

醉後題僧院　醉後僧院に題す　杜牧

艅船一掉百分空　艅船 一掉 百分空し
十歳青春不負公　十歳の青春 公に負かず
今日鬢絲禪榻畔　今日 鬢絲 禅榻の畔
茶煙輕颺落花風　茶煙 軽く颺る 落花の風

【語釈】
○艅船…角で出来た舟の形をした大杯。○一棹…ぐいっと一飲み（艅船と言ったので）。　○百分…多くの憂い。或いは、すっかり全部。○空…空になる。十歳…十年。○不負公…誰にも負けない。○鬢糸…白髪交じりの鬢。○禅榻…禅寺の長いす。
（新釈漢文大系　詩人編９）

經汾陽舊宅　汾陽の旧宅を経

趙嘏

門前不改舊山河　門前改まらず　旧山河
破虜曾輕馬伏波　虜を破りて　曽て　馬伏波を軽んず
今日獨經歌舞地　今日独り歌舞の地を経れば
古槐疎冷夕陽多　古槐　疎冷にして　夕陽多し

【語釈】
○汾陽…郭子儀のこと。安史の乱の鎮圧に功績があり、汾陽郡王に封ぜられた。○馬伏波…後漢の伏波將軍馬援。○古槐…古いエンジュの木。○疎冷…まばらで冷ややかなこと。

十日菊　十日の菊

鄭谷

節去蜂愁蝶不知　節去り　蜂愁えて　蝶は知らず
曉庭還繞折殘枝　曉庭に　還た繞る　折残の枝
自緣今日人心別　自ら　今日　人心の別なるに縁る
未必秋香一夜衰　未だ必ずしも　秋香は一夜にして衰えず

【語釈】
○十日菊…重陽の節句の翌日の菊をいう○。節去…重陽が過ぎたことをいう。○蜂愁蝶不知…蜂は重陽が過ぎたことを知り、蝶は知らぬ。○還繞…蝶が菊の周りを飛ぶ。○折殘枝…重陽が過ぎ、折れ損なわれた菊のこと。○人心別…重陽が過ぎると誰も菊に見向きもしないのは、人の節に重きをおくがためなり。菊が変わるわけではない。○秋香…菊の香り。重陽が過ぎても菊の香りに変わりはない、一日過ぎたとしても十分に賞するに値する。

老圃堂

薛能

邵平瓜地接吾廬　　邵平の瓜地　吾が廬に接す
穀雨乾時偶自鋤　　穀雨　乾く時　偶たま自ら鋤く
昨日春風欺不在　　昨日　春風　不在を欺き
就牀吹落讀殘書　　就牀に吹き落とす読残の書

【語釈】
○老圃堂…作者の書斎の名。○老圃は、畑作りによくなれた農夫のこと。老農に同じ。○邵平瓜地…邵平の瓜畑。邵平の故事あり。○穀雨…二十四節気のひとつで、穀物を育てる雨の意。○鋤…田畑を耕すこと。○就床吹落…床に置いていた書物が吹き落とされた。讀殘書…読みかけの書物。

偶興

羅隱

逐隊隨行二十春　　隊を逐い　行に従う　二十春
曲江池畔避車塵　　曲江の池畔に車塵を避く
如今贏得將衰老　　如今　贏ち得えたり　衰老を将って
閑看人間得意人　　閑に人間を看る　得意の人

【語釈】
○偶興…興に乗じて偶々作った詩。○逐隊隨行…多くの人が科挙の試験に挑戦し、作者自身も進士及第を目指したことをいう。○二十春…二十年。○曲江池畔…長安の東南にある池。○如今…いま。現在。○贏得…結局のところ・・・だけが得たものとして残るの意。○衰老…年をとり元気がなくなること。○人間…人の世。世間。得意人…進士に及第した人たち。

悼亡妓　亡妓を悼む　朱褒

魂歸溟漠魄歸煙　魂は溟漠に帰し　魄は煙に帰す
只住人間十八年　只　人間に　住すること十八年
昨日施僧裙帶上　昨日　僧に施す　裙帶の上
斷腸猶繫琵琶弦　断腸す　猶お琵琶の弦を繫くるに

【語釈】
○魂…人の精神を司るたましい。○魄…人の肉体や形質を司る魂。○溟漠…天空。○煙…靄、霞。ここでは地のこと。○施僧…死後十七日目に死者が愛用していた物を僧に施す習慣があった。○裙帶…もすその紐。○繫琵琶弦…裙帶を縛るのに、琵琶の弦を使用する。

送元二使安西　元二の安西に使するを送る　王維

渭城朝雨浥輕塵　渭城の朝雨　軽塵を浥す
客舍青青柳色新　客舍　青々　柳色　新たなり
勸君更盡一杯酒　君に勧む　更に尽くせ　一杯の酒
西出陽關無故人　西のかた　陽関を出でなば　故人　無からん

【語釈】
○元二…元家の二番目の男性。○安西…甘粛省の外れ、安西都護府が置かれていた。○渭城…今の咸陽。○輕塵…軽い土埃。○客舍…旅館。○陽關…玉門関〔天山北路〕と並ぶ西方外れの天山南路の関所、敦煌の近くにある。○故人…古くからの友人。（唐詩選）

三月晦日贈劉評事

三月正當三十日
風光別我苦吟身
共君今夜不須睡
未到曉鐘猶是春

三月晦日 劉評事に贈る

賈島

三月 正に三十日に当たり
風光 我が苦吟の身に別かる
君と共に 今夜 睡ることを須いず
未だ 曉 鐘に到らざれば 猶お是れ春

【語釈】
○晦日…一ヶ月の月末の日、三月晦日は春の最後の日。○評事…大理寺（最高裁判所）に属する下級の裁判官。○正當…ちょうど～になる。○風光…美しい自然のながめ。○苦吟…苦心して詩歌を作ること。○不須…～に及ばない。もちいず。○曉鐘曉鐘…黎明を告げる鐘の音。○猶是…なおまだ～だ。

武昌阻風

江上春風留客舟
無窮歸思滿東流
與君盡日閑臨水
貪看飛花忘却愁

武昌にて風に阻まる

方沢

江上の春風 客舟を留め
窮まり無き帰思 東流に満つ
君と尽日 閑かに水に臨み
飛花を 貪ぼり看て 愁を忘却す

【語釈】
○武昌…湖北省武漢市武昌鎮。○客舟…旅客船。○歸思…故郷へ帰りたいと思う心。

己亥歳　己亥の歳（きがい）

曹松（そうしょう）

澤國江山入戰圖　沢国（たくこく）の江山　戦図（せんと）に入る
生民何計樂樵蘇　生民　何の計あってか　樵蘇（しょうそ）を楽しまん
憑君莫話封侯事　君に憑（たの）む　話すこと莫かれ　封侯の事
一將功成萬骨枯　一将　功成って　万骨枯る

【語釈】
○己亥歳…８７９年、黄巣の乱の最中。○沢国…池や沼の多い江淮の地（江蘇省、安徽省）を指す。○江山…山河。○戦図…交戦地域。○生民…人民。○樵蘇…薪を拾うことと草を刈ること、庶民の生計のことになる。○憑…たのむ。お願いする。○封侯…諸侯に封ぜられること。一将…ひとりの将帥。○万骨…多くの兵卒の骸○。枯…ひからびる、白骨となる。

虚接

伏翼西洞送夏方慶

洞裏春晴花正開
看花出洞幾時迴
殷勤好去武陵客
莫引世人相逐來

伏翼の西洞にて夏方慶を送る　陳羽

洞裏の春晴　花　正に開く
花を看　洞を出でて　幾時にか迴る
殷勤に　好し　去れ　武陵の客
世人を引き　相逐い来たらしむこと莫かれ

【語釈】
○伏翼西洞…四川省長寧県の冷水渓にある洞。○夏方慶…韓愈と同年の進士。事跡不祥。○春晴…春の晴れた日。○承句…陶淵明の『桃花源記』の漁師になぞらえて、「いつ帰るのだろうか」の意。○武陵客…武陵に特定の意味なし。○結句…『桃花源記』になぞらえて、俗人を連れて来るなの意。

題明惠上人房

簷前朝暮雨添花
八十呉僧飯熟麻
入定幾時還出定
不知巣燕污袈裟

明惠上人の房に題す　秦系

簷前　朝暮に　雨　花を添え
八十の呉僧　熟麻を飯す
定に入りて幾時か　還た定を出でん
知らず　巣燕の　袈裟を汚すを

【語釈】
○明惠上人…不祥。○簷前…軒の前。○熟麻…ごま飯。粗末な食事。○入定…座禅に入る。○出定…座禅を終わる。○巣燕…巣をかけている燕。巣作りのために泥を加えて運ぶ。

寄許錬師　　戎昱

掃石焚香禮碧空　　石を掃い　香を焚きて　碧空に礼す
露華偏濕蕊珠宮　　露華　偏えに　湿す　蕊珠宮
如何說得天壇上　　如何んぞ　説き得ん天壇の上
萬里無雲月正中　　万里　雲無く　月の正中なるを

【語釈】
○許錬師…不祥、錬師は道教における徳の高い物に対する称号。○碧空…空の太乙星。○露華…露水。○蕊珠宮…天上にある殿郭（『黄庭経』による。）○天壇…天を祀る高壇。

秋思　　張籍

洛陽城裏見秋風　　洛陽城裏　秋風を見る
欲作家書意萬重　　家書を作らんと欲すれば　意　万重
復恐匆匆說不盡　　復た恐る　匆々　説いて尽くさざるを
行人臨發又開封　　行人　発するに臨みて　又　封を開く

【語釈】
○城裏…城壁に囲まれた市街の中。○家書…家族へあてた手紙○。意万重…「あれも書きたい、これも書きたい」と、思いが幾重にも重なること。○忽忽…慌ただしいさま。○行人…飛脚。（唐詩選）

懐吳中馮秀才　　**吳中の馮秀才を懐う**　　杜牧

長洲苑外草蕭蕭　　長洲苑外草蕭々

却筭遊程歳月遙　　却って遊程を筭うれば歳月遙なり

唯有別時今不忘　　唯だ別時の今忘れざる有り

暮煙秋雨過楓橋　　暮煙秋雨楓橋を過ぐ

【語釈】

丸う呉中…江蘇省呉県（蘇州市）。○馮秀才…馮という姓の科挙試験合格者。○長洲苑…古の苑の名、春秋時代の呉王・闔閭が遊猟した処。○蕭蕭…ものさびしいさま。○遊程…旅路の行程。○唯有…ただ…だけがある。別時…別れたとき。○暮煙…夕暮れに立つもや。○楓橋…江蘇省蘇州市の郊外にある橋の名。（杜樊川絶句詳解）

念昔遊　昔遊を念(おも)う　杜牧(とぼく)

李白題詩水西寺　李白 詩を題す 水西寺(すいせいじ)
古木回巖樓閣風　古木 回巖(かいがん) 楼閣の風
半醒半醉遊三日　半醒(はんせい) 半酔(はんすい) 遊ぶこと三日
紅白花開烟雨中　紅白の花開く 煙雨の中(うち)

【語釈】
○昔遊…昔遊んだこと。○題詩…詩を書き付ける。○水西寺…安徽省宣城の水西山の上にあった三つの寺の総称。○廻巖…巖を取り巻いている。○半醒半酔…ほろ酔い。○三日…三日間。

寄友　友に寄す　李群玉(りぐんぎょく)

野水晴山雪後時　野水 晴山 雪後の時
獨行邨落更相思　独り邨落(そんらく)を行きて 更に相思(あいおも)う
無因一向溪橋醉　一たび 溪橋に向(お)いて 酔うに因無(よしな)し
處處寒梅映酒旗　處々(しょしょ)の寒梅 酒旗に映ず

【語 釈】
○野水…野を流れる小川。○晴山…雨後や雪後の山。○雪後時…雪がやんだ時。○村路…村の小道。○無因…原因がない。きっかけがない。○溪橋…谷川にかかる橋。○處處…あちらこちら。○寒梅…寒中に咲く梅。早咲きの梅。○酒旗…酒屋の目印の旗、のぼり。

經賈島墓　　賈島の墓を経

鄭谷

水繞荒墳縣路斜　　水は荒墳を繞りて　県路　斜めなり
耕人訝我久咨嗟　　耕人　我の　久しく咨嗟するを　訝る
重來兼恐無尋處　　重来　兼ねて恐る　尋ぬる処無きを
落日風吹鼓子花　　落日　風は吹く　鼓子の花

【語釈】
○賈島…中唐の詩人、「推敲」で名高い。○縣路…県で作った道。○耕人…農夫。○咨嗟…嘆息する。○鼓子花…ひるがお。

修史亭　　修史亭

司空圖

烏紗巾上是青天　　烏紗巾上　是れ青天
檢束酬知四十年　　検束して知に酬ゆること　四十年
誰料平生臂鷹手　　誰か料らん　平生　鷹を臂しせし手に
挑燈自送佛前錢　　燈を挑げて　自ら　仏前の銭を送らんとは

【語釈】
○修史亭…司空圖の隠棲地である中条山（山西省南部）に作った読書堂。○檢束…我が身を引き締める。○知…宰相虞公が知己であった。○烏紗巾…自分の頭。○起句…君恩を長記して忘れないの意。○臂鷹…鷹を肘に乗せて鷹狩りをする、

答韋丹　韋丹に答う

僧靈澈

年老心閑無外事　年老い 心閑かに 外事無し
麻衣草座亦容身　麻衣 草座 亦た身を容る
相逢盡道休官去　相逢いて 尽く道う 官を休めて去らんと
林下何曾見一人　林下 何ぞ 曽て 一人を見ん

【語釈】
○韋丹…京兆萬年（西安）の人。顔真卿の外孫。江南西道監察御史に到る。○外事…世俗のこと。○麻衣草座…麻の衣と草の座布団、仏道者の質素な生活。

九日憶山東兄弟　九日山東の兄弟を憶う

王維

獨在異鄉爲異客　独り 異郷に在りて 異客と為り
毎逢佳節倍思親　佳節に逢う毎に 倍ます親を思う
遙知兄弟登高處　遙かに知る 兄弟高きに登る処
遍插茱萸少一人　遍く 茱萸を插みて 一人を少くを

【語釈】
○九日…九月九日、重陽の節句。○異客…旅人。○佳節…祝い事の日。○遥知…（これ以下の内容を）遠くから察する。遍あまねく、みんな。○茱萸…ハジカミ、山椒の葉。（唐詩選）

題葉道士山房　　顧況

水邊楊柳赤欄橋
洞裏仙人碧玉簫
近得麻姑書信否
潯陽江上不通潮

葉道士の山房に題す

水辺の楊柳　赤欄の橋
洞裏の仙人　碧玉の簫
近ごろ麻姑の書信を得るや否や
潯陽江上　潮を通ぜず

【語釈】

○葉道士…不祥。○麻姑…中国神話に登場する仙女である。若く美しい娘で、鳥のように長い爪をしているという。○潯陽江…江西省九江市を流れる川。この地方は美人が多いとされる。

宿昭應　　顧況

武帝祈靈太乙壇
新豐樹色繞千官
那知今夜長生殿
獨閉空山月影寒

昭応に宿す

武帝　霊を祈る　太乙壇
新豊の樹色　千官を繞る
那ぞ知らん　今夜　長生殿
独り　空山月影の寒きに　閉ざさんとは

【語釈】

○昭應…陝西省西安市臨潼区。驪山の西北。○武帝…漢の武帝。○祈靈…神霊に祈願すること。○太乙壇…天帝の太乙を祀るために築いた祭壇。○新豊…昭応の旧名。○長生殿…華清宮の中にある宮殿の名。○空山…人ひと気けのない寂しい山。○月影…月光。（唐詩選）

江村即事　江村即事（こうそんそくじ）

司空曙（しくうしょ）

釣罷歸來不繫船　釣を罷（や）め 帰り来りて 船を繫（つな）がず
江村月落正堪眠　江村 月落ちて 正（まさ）に眠るに堪えたり
縱然一夜風吹去　縱然（たとい） 一夜 風吹きて去るとも
只在蘆花淺水邊　只 蘆花 浅水（せんすい）の 辺（ほとり） に在らん

【語釈】
○江村…川辺の村。○即事…その場の事柄や様子、風景をよんだ詩歌。○縱然…たとえ…であろうとも。○吹去…吹き飛ばす。去…動詞の後に附いて、動作が遠ざかる、持続する感じを表す。～しさる。○只在…ただ～にあるだけ。○淺水…浅瀬。

宮人斜　宮人斜（きゅうじんしゃ）

雍裕之（ようゆうし）

幾多紅粉委黃泥　幾多の紅粉 黄泥（こうでい）に委（い）す
野鳥如歌又似啼　野鳥 歌う如く 又啼くに似たり
應有春魂化爲燕　応（まさ）に 春魂（しゅんこん）の 化して燕と為り
年年飛入未央棲　年々飛んで 未央（びおう）に入りて棲（す）む有るべし

【語釈】
○宮人斜…長安郊外にある女官の墓地。○紅粉…美女。○春魂…宮女の魂。○未央…未央宮、西安市の西北 にあった宮殿。前漢の皇帝の居場所であった。

過春秋峽

峭壁蒼蒼苔色新
無風情景自勝春
不知何樹幽崖裏
臘月開花似北人

春秋峽を過ぐ

劉言史

峭壁蒼々苔色新たなり
風情無き景も自ら春に勝る
知らず何の樹か幽崖の裏
臘月に開花し北人に似す

○春秋峽…江蘇省徐州にある峽谷。○峭壁…壁のように険しく聳った崖。○蒼蒼…青々としたさま。○幽崖…深い趣のある崖。○臘月…陰暦十二月。

初入諫司喜家室至

一旦悲歡見孟光
十年辛苦伴滄浪
不知筆硯緣封事
猶問傭書日幾行

初めて諫司に入り家室の至るを喜ぶ

竇群

一旦の悲歡孟光を見る
十年の辛苦滄浪に伴う
知らず筆硯の封事に縁るを
猶お問う傭書日に幾行かと

【語釈】

○諫司…天子を諫めるもの（補闕、拾遺）が努める役所。○家室…妻。○一旦…忽ち。○悲歡…悲しみと喜び。○孟光…後漢の梁鴻の妻、夫に定説を尽くし「挙案斉眉」で知られる。自分の妻をなぞらえた。○滄浪…屈原のような流謫の身。○筆硯縁封事…天子へ奏上する諫文に封をすること。○傭書…賃仕事の筆耕文。

寄襄陽章孝標

青油幕下白雲邊
日日空山夜夜泉
聞説小齋多野意
枳花陰裏麝香眠

襄陽の章孝標に寄す　雍陶

青油幕下　白雲の辺
日々の空山　夜々の泉
聞説く　小斎　野意多しと
枳花陰裏　麝香眠らん

【語釈】
○襄陽…湖北省襄陽市襄城区。○章孝標…唐睦州桐廬人一九年の進士。大理評事に到る。○青油幕下…將軍（節度使）の幕下。○小齋…小さな書斎。○野意…山野の趣。○枳花…からたちの花。○麝香…香の一種。

舊宮人　旧宮人　劉得仁

白髪宮娃不解悲
滿頭猶自插花枝
曾緣玉貌君王寵
準擬人看似舊時

白髪の宮娃悲みを解せず
滿頭猶お自ら花枝を插す
曾て玉貌　君王の寵せしに縁って
準擬す　人の看て　旧時に似んことを

【語釈】
○宮娃…宮女。○玉貌…玉のよう容貌。○準擬…希望する。なぞらえ擬する。

小樓　　小楼

儲嗣宗

松杉風外亂山青　　松杉風外　乱山青し
曲几焚香對石屏　　曲几に香を焚いて　石屏に対す
記得去年春雨後　　記し得たり　去年　春雨の後
燕泥時污太玄經　　燕泥　時に　太玄経を汚せしを

【語釈】
○曲几…脇息。○石屏…石で出来た屏風。○燕泥…燕が巣作りのために口に銜えて運ぶ泥。○記得…憶えている。○太玄經…経典の一つ。

宮詞

王建

樹頭樹底覓殘紅　　樹頭樹底に　残紅を覓むれば
一片西飛一片東　　一片は西に飛び　一片は東す
自是桃花貪結子　　自ら是れ　桃花　子を結ぶを　貪り
錯教人恨五更風　　錯って　人をして　五更の風を恨ましむ

【語釈】
○宮詞…宮廷のことを詠った詩。○殘紅…散り残りの紅い花。○五更…夜明け。（寵愛を得て天子の子を産もうとする宮女を桃花になぞらえる。）

祇役遇風謝湘中春色　役を祇(うやま)いて 風に遇い 湘中の春色を謝す

熊孺登(ゆうじゅとう)

水生風熟布帆新　水生じ 風熟して 布帆(ふはん)新たなり
只見公程不見春　只 公程(こうてい)を見て 春を見ず
應被百花撩亂笑　応(まさ)に 百花の撩乱(りょうらん)たるに 笑わるべし
比來天地一閑人　比来(ひらい) 天地の一閑人(いちかんじん)

【語釈】
○湘中…湖南省。○春色…春景色。○謝…わびる。○風熟…淳部ウニなる。○布帆新…帆船が新たに出発する。○公程…公務による旅程。○應…「まさに～すべし」と読み、「きっと～に違いない」の意。○比來…もとより。以前。

過勤政樓　勤政楼(きんせいろう)に過ぎる

杜牧(とぼく)

千秋佳節名空在　千秋の佳節 名は空しく在り
承露絲囊世已無　承露(しょうろ)の糸嚢(しのう) 世に已に無し
唯有紫苔偏稱意　唯だ 紫苔(したい)有りて 偏えに意に称(かな)い
年年因雨上金鋪　年々 雨に因(よ)り 金鋪(きんぽ)に上る

【語釈】
○勤政樓…玄宗が設けた宮殿。○千秋佳節…玄宗の誕生日、八月十五日。○承露絲囊…この日、三公が「承露囊」を献じて誕生日を祝賀した。○紫苔…青苔。○金鋪…楼の金製の蝶つがい。

送客　客を送る

李群玉（りぐんぎょく）

沅水羅文海燕回　沅水の羅文（げんすい らもん）海燕（かいえん）回（かえ）り
柳條牽恨到荆臺　柳條（りゅうじょう）恨（うらみ）を牽（ひ）きて荆台（けいだい）に到る
定知行路春愁裏　定めて知る行路　春愁の裏（うち）
故郢城邊見落梅　故郢城辺（こようじょうへん）に　落梅を見んことを

【語釈】
○沅水…湖南省北部を東に流れて洞庭湖に入る川。○羅文…水面の波立つさま。○海燕…うみつばめ。○柳條…しだれ柳の枝。○荊臺…荊州、今の湖北省江陵。○定知…きっと～に違いない。○故郢城…戦国時代の楚の都、江陵にあった。

靈巖寺　靈巖寺（れいがんじ）

趙嘏（ちょうか）

館娃宮伴千年寺　館娃宮伴（かんあきゅうはん）　千年の寺
水闊雲多客到稀　水闊（ひろ）く雲多く　客の到ること稀なり
聞說春來倍惆悵　聞說（きくなら）く　春来りて　倍（ます）ます惆悵（ちゅうちょう）すと
百花深處一僧歸　百花深き処　一僧帰る

【語釈】
○靈巖寺…江蘇省蘇州のすぐ南、呉県の西南にある寺。○館娃宮…呉王夫差の宮殿、美人西施のために建てた○。聞說…聞くことには。○惆悵…うらみなげくさま。

柳枝　柳枝（りゅうし）　薛能（せつのう）

和風烟雨九重城　和風 煙雨 九重の城
夾路春陰十萬營　路を 夾（さしはさ）む春陰 十万の営（えい）
唯向邊頭不堪望　唯だ 辺頭（へんとう）に向（むか）いて 望むに堪えず
一株憔悴少人行　一株 憔悴（しょうすい）して 人行 少（まれ）なり

【語釈】
○和風…春風。○柳枝…楽府題の「折楊柳」、別れの歌。○煙雨…霧雨。○九重城…宮城。○春陰…花曇り。○十萬營…多数の柳が十萬の軍営に見えること。○邊頭…辺鄙な地。○邊頭では、柳が一株しかないこと。

自遣　自（みずか）ら遣（や）る　陸龜蒙（りくきもう）

數尺遊絲墮碧空　数尺（すうしゃく）の遊糸（ゆうし） 碧空（へきくう）より墮（お）つ
年年長是惹春風　年々 長く是れ 春風を惹（ひ）く
爭知天上無人住　争でか知らん 天上 人の住む無きを
亦有春愁鶴髮翁　亦た 春愁（しゅんしゅう） 鶴髮（かくはつ）の翁有らん

【語釈】
○自遣…心の憂さを自分で晴らす。○遊絲…空中にチラチラと糸のように見える物。○碧空…青空。○春愁…春の愁い、もの悲しさ。○鶴髮…白髮。

華陽巾　華陽巾（かようきん）

陸龜蒙（りくきもう）

蓮花峰下得佳名
雲褐相兼上鶴翎
須是古壇秋霽後
靜焚香炷禮寒星

蓮花峰下（れんげほうか）　佳名（かめい）を得たり
雲褐（うんかつ）　相兼（あいか）ねて　鶴翎（かくしょう）に上る
須（すべか）らく　是れ　古壇秋霽（こだんしゅうせい）の後
静かに香炷（こうしゅ）を焚（た）いて寒星（かんせい）に礼すべし

【語釈】
○華陽巾…梁の陶弘景が発明した物で、隠者が被る頭巾。○蓮花峰…華山（陝西省洛陽の南にある五嶽の一つ。）の峰。○雲褐…仙人の衣服。○鶴翎…鶴の翼。○須…「すべからく～すべし」と読み、「必ず～しなければ鳴らない、当然～すべきである、の意。○秋霽…秋の雨後の晴天。○香炷…香のひとくゆり。○寒星…太乙星。天帝の象徴。

秋色　秋色（しゅうしょく）

吳融（ごゆう）

染不成乾畫未銷
霏霏拂拂又迢迢
曾從建業城邊過
蔓草寒煙鎖六朝

染めて　乾くを成さず　画いて　未だ銷（しょう）せず
霏々（ひひ）　拂々（ふつふつ）　又　迢々（ちょうちょう）
曾つて　建業城辺（けんぎょうじょうへん）従（よ）り過ぎれば
蔓草（まんそう）　寒煙（かんえん）　六朝を鎖（とざ）せり

【語釈】○秋色…秋景色、秋の気配。○霏霏…雨や雪のしきりに降りしきるさま。○拂拂…水のわき出るさま。○迢迢…遙かに遠いさま。○建業城…南京。○蔓草…はびこっている草。○寒煙…寒々とした靄。○六朝…南京。

李穆に酬ゆ

劉長卿

孤舟相訪至天涯　孤舟　相い訪いて　天涯に至る
萬轉雲山路更賒　万転の雲山　路　更に賒かなり
欲拂柴門迎遠客　柴門を払いて遠客を迎えんと欲すれば
青苔黄葉滿貧家　青苔　黄葉　貧家に満つ

【語釈】
○李穆…劉長卿の娘婿。○酬…詩を送られたことの返礼。○相訪…尋ねてくる。○天涯…地の涯。ここでは、作者（劉長卿）の許のこと。○万転…何度も向きを変える意。○雲山…雲のかかった高い山。○柴門…柴を編んでつくった粗末な門。○遠客…遠くから来た客、ここでは李穆を指す。○黄葉…もみじ葉、秋になって葉が黄色く変わる葉。○貧家…貧しい家、寒家。

休日訪人不遇　休日に人を訪ねて遇わず

韋應物

九日驅馳一日閑　九日　駆馳して　一日閑なり
尋君不遇又空還　君を尋ねて遇わず　又空しく還える
怪來詩思清人骨　怪しみ来たる　詩思の人骨を清めることを
門對寒流雪滿山　門は寒流に対し　雪は山に満つ

【語釈】
○驅馳…走り回ること（役人の休日は十日に一日）。怪來…あやしむ（「來」は助辞）。詩思…詩を作ろうと思う心。人骨…人。

湘江夜泛　　湘江に夜泛ぶ

熊孺登

江流如箭月如弓　　江流は箭の如く 月は弓の如し
行盡三湘數夜中　　行き尽くす 三湘 数夜の中
無那子規知向蜀　　那ともする無し 子規の蜀に向うを知るを
一聲聲似怨春風　　一声 声は似たり 春風を怨むに

【語釈】
○湘江…湖南省を南から北へ横断して洞庭湖に流入する川。○泛…舟に乗って浮かぶ。○三湘…灘湘、瀟湘、蒸湘で、湘江の流れの全て。○無奈…どうしようもない。

贈侯山人　　侯山人に贈る

熊孺登

一見清容愜素聞　　一たび 清容を見て 素聞に愜う
有人傳是紫陽君　　人有りて伝う 是れ 紫陽君と
來時玉女裁春服　　来たる時 玉女 春服を裁し
翦破湘山幾片雲　　翦破す 湘山 幾片の雲

【語釈】
○侯山人…不祥、山人は山に住む隠者。○清容…秀美な姿。○素聞…もとから聞いていること。○紫陽君…紫陽真人、古の仙人。○玉女…紫陽君の侍女。○翦破…切り裂く。○湘山…泉州（福建省泉州市）に在ったという仙山。○幾片雲…雲を裁断して春服を作った。

寫情　情を写す

李益（りえき）

水紋珍簟思悠悠　水紋の珍簟（ちんてん）　思い悠々（ゆうゆう）
千里佳期一夕休　千里の佳期　一夕に休（や）む
從此無心愛良夜　此れ從り　良夜を愛するに心無し
任他明月下西樓　任他（さもあらばあれ）　明月　西楼に下る

【語釈】

○珍簟…美しいたかむしろ。○悠悠…思いの際限のないさま。○千里佳期…地方に任官して遠く離れた所から再会を思っていたこと。○任他…ままよ。

竹枝詞　竹枝詞（ちくしし）

劉禹錫（りゅうしゃく）

日出三竿春霧消　日出でて　三竿　春霧　消ゆ
江頭蜀客繫蘭橈　江頭の蜀客　蘭橈（らんとう）を繫（つな）ぐ
欲寄狂夫書一紙　狂夫に寄せんと欲す　書一紙（しょいっし）
家住成都萬里橋　家は成都萬里橋に住すと

【語釈】

○竹枝詞…劉禹錫が始めた物で、地方の民謡、風俗などを七言絶句の形で詠った物。○三竿…竿三本の高さ。○春霧…春の朝霧。○蜀客…蜀からの旅人。○蘭橈…小舟の美称。○狂夫…自分の旦那のこと。○萬里橋…成都の浣花渓の東にある橋の名。

聽舊宮人穆氏歌

曾随織女渡天河
記得雲間第一歌
休唱貞元供奉曲
當時朝士已無多

旧宮人穆氏の歌を聽く

劉禹錫

曽て 織女に随いて 天河を渡り
記し得たり 雲間 第一の歌
唱うを休めよ 貞元 供奉曲
当時の朝士 已に多きこと無し

【語釈】
○宮人穆氏…不祥、宮人は宮女。○織女…穆氏のこと。○渡天河…作者が宮中に入ったこと。○記得…記憶した。○貞元…徳宗の年号。○供奉曲…天子の為に奏する曲。○朝士…朝廷の官。

訪隱者不遇

籬外涓涓澗水流
槿花半點夕陽收
欲題名字知相訪
又恐芭蕉不耐秋

隠者を訪ねて遇わず

竇鞏

籬外 涓々 澗水流る
槿花 半ば点じ 夕陽収まる
名字を題して 相訪ねしを知らしめんと欲するも
又恐る 芭蕉の 秋に耐えざるを

【語釈】
○籬外…まがきの外。○涓涓…水がちょろちょろ流れるさま。○澗水…谷川の水。○槿花…むくげの花。○夕陽…夕日。○題名字…名前を書き付ける。○相…動作が相手に及ぶこと。○不耐秋…秋に負けて枯れしまう。

重過文上人院

南隨越鳥北燕鴻
松月三年別遠公
無限心中不平事
一宵清話又成空

重ねて文上人の院に過ぎる

李渉（りしょう）

南は越（えつちょう）鳥に隨い　北は燕鴻（えんこう）
松月（しょうげつ）　三年　遠公に別る
限り無き心中　不平の事
一宵（いちしょう）の清話（せいわ）に　又　空と成る

【語釈】
○越鳥…越（浙江省）の鳥、南の方の鳥。○燕鴻…燕（河北省）の鴻（雁の大きな物）、北の方の鳥。○松月…松の木にかかる月。○遠公…慧遠（晉のとき、廬山にいた高僧）、ここでは文上人をなぞらえる。

題鶴林寺

李渉（りしょう）

終日昏昏醉夢間
忽聞春盡強登山
因過竹院逢僧話
又得浮生半日閑

鶴林寺（かくりんじ）に題す

終日　昏々　酔夢の間
忽ち　春尽くるを聞きて　強いて山に登る
竹院に過ぎりて　僧に逢いて話るに因りて
又　得たり　浮生　半日の閑

【語釈】
○鶴林寺…江蘇省鎮江市南郊にある寺。○昏昏…うつらうつらしているさま。○竹院…竹を庭に植えた書院。○浮生…はかない世。

宮詞　宮詞

李商隱（りしょういん）

君恩如水向東流　君恩は　水の　東に向って流るるが如し
得寵憂移失寵愁　寵（ちょう）を得ては　移らんことを憂（うれ）い　寵（ちょう）を失いては愁う
莫向尊前奏花落　尊前（そんぜん）に向（お）いて　花落（からく）を奏すること莫かれ
涼風只在殿西頭　涼風は　只　殿の西頭（せんてい）に在り

【語釈】
○宮詞…宮廷のことを詠った詩。○君恩…天子の寵愛。○尊前…酒樽の前、宴席。○花落…「梅花落」、笛の曲、楽府題。○涼風…秋風、寵の衰える前兆。

將赴吳興登樂遊原　将に呉興（ごこう）に赴（おもむ）かんとし楽遊原（がくゆうげん）に登る

杜牧（とぼく）

清時有味是無能　清時に味有るは　是れ　無能
閑愛孤雲靜愛僧　閑（しずか）に孤雲を愛し　静かに僧を愛す
欲把一麾江海去　一麾（いっき）を把りて江海に去らんと欲し
樂遊原上望昭陵　楽遊原上　昭陵を望む

【語釈】
○楽游原…長安の南東、曲江の北にあった台地、人々の遊覧の場所であった。○清時…世の中が良く治まったとき。○麾…州の長官の旗指物。○江海…地方。○昭陵…唐朝の礎を築いた（貞観の治）太宗の陵。
（新釈漢文大系　詩人編９）

鄭瓘協律　　鄭瓘協律（ていかんきょうりつ）　杜牧（とぼく）

廣文遺韻留樗散　　廣文の遺韻（いいん）樗散（ちょさん）を留む
雞犬圖書共一船　　雞犬 図書 共に一船
自説江湖不歸事　　自ら説く 江湖 帰らざるの事
阻風中酒過年年　　風に阻（はば）まれ 酒に中（あた）たり 年々（ねんねん）を過ぐと

【語釈】
○鄭瓘協律…協律郎（薬の調剤をする官）であった鄭瓘に贈った詩
○広文…弘文館博士、鄭瓘の祖父は弘文館博士であった。○遺韻…昔の遺風。○樗散…無能で役に立たない人。○江湖…川と湖の地方、隠者の住まい。
（杜樊川絶句詳解）

贈魏三十七　　魏（ぎ）三十七に贈る　　李群玉（りぐんぎょく）

名珪似玉淨無瑕　　名珪（めいけい） 玉に似て 淨（きよ）くして瑕（きず）無し
美譽芳聲有數車　　美譽（びよ） 芳声（ほうせい） 数車有り
莫放燄光高二丈　　燄光（えんこう）を放ちて 高さ二丈ならしむ莫れ
來年燒殺杏園花　　来年 燒殺（しょうさつ）せん 杏園の花

【語釈】
○名珪…優れた玉の一種、魏をなぞらえる。○承句…数台の車に乗せるほどの名誉と名声がある。○燄光…炎と光。○杏園…長安の曲江の畔にあった庭園、科挙の及第者がここで宴を賜った。

湘妃廟

少将風月怨平湖
見盡扶桑水到枯
杏花壇上相約去
畫闌紅子鬬撈蒲

湘妃廟（しょうひびょう）

李群玉（りぐんぎょく）

少らく（しば） 風月を将って（も） 平湖を怨む（うら）
見尽くさんとす 扶桑（ふそう） 水の枯るるに到るを
杏花壇上（きょうかだんじょう）に 相約（あいやく）して去り
画闌（がらん）の紅子 撈蒲（ちょほ）を鬬わしめん

【語釈】
○湘妃廟…舜の妃である娥皇の廟、黄陵廟。○平湖…浪立たない湖。
○扶桑…東海中にあるとされる神木。○杏花壇…講義をするところ。
○畫闌紅子…すごろく盤の筋線。○撈蒲…「サイコロ」で戦う遊び。

用事

秋日過員太祝林園　　秋日 員太祝の林園に過ぎる　　李渉

望水尋山二里餘　　水を望み 山を尋ねて 二里余
竹林斜到地仙居　　竹林 斜めに到る 地仙の居
秋光何處堪消日　　秋光 何れの処か 日を消するに堪えたる
玄晏先生滿架書　　玄晏先生 満架の書

【語釈】
○員太祝…不祥、太祝は神を祀ることを司る官。○地仙…地上にいる仙人。員太祝をなぞらえる。○玄晏先生…晉の皇甫謐のこと、平生書を好む。員太祝をなぞらえる。

長安作　　長安の作　　李渉

宵分獨坐到天明　　宵分に独坐し 天明に到る
又策羸驂信脚行　　又 羸驂に策ち 脚に信かせて行く
毎日除書雖滿紙　　毎日 除書 紙に満つと雖 もえ
不曾聞有介推名　　曽て 介推の名 有るを聞かず

【語釈】
○宵分…夜半。○天明…夜明け。○羸驂…毎日乗る疲労した馬。○除書…官から出る辞令書。官報。○介推…晉の文公に使えた会子推、功績があったのに酬いられなかった。自分をなぞらえている。

奉誠園聞笛　奉誠園に笛を聞く

竇牟

曾絶朱纓吐錦茵　曽て 朱纓を絶って錦茵に吐す
欲披荒草訪遺塵　荒草を披き 遺塵を訪ねんと欲す
秋風忽灑西園涙　秋風 忽ち灑ぐ 西園の涙
滿目山陽笛裏人　滿目 山陽笛裏の人

【語釈】
○奉誠園…北平王馬燧（作者の主人）の旧宅で、子の馬暢が徳宗に献じて庭園となった。○絶朱纓…楚の荘王の故事。○吐錦茵…漢の丙吉の故事。○遺塵…前人の行動の痕跡。○西園涙…曹植の故事（魏書）。○山陽笛…晉の向秀が山陽の旧宅を通り過ぎたとき、笛の音を聞いて級友を思い出し作った「思舊賦」のこと。

冬夜寓懐寄王翰林　冬夜の寓懐 王翰林に寄す

竇庠

滿地霜蕪葉下枝　滿地の霜蕪 葉 枝を下る
幾回吟斷四愁詩　幾回か吟断す 四愁の詩
漢家若欲論封禪　漢家 若し 封禅を論ぜんと欲せば
須及相如未病時　須らく 相如 未だ病ざる時に及ぶべし

【語釈】
○寓懐…思いを寄せる。○王翰林…不祥、翰林は翰林学士。○霜蕪…霜の降りた草原。○四愁詩…後漢の張衡の作（『文選』にあり。○封禪…天子が天と地を祀る儀式。○相如…司馬相如、死ぬときに封禪を行うように武帝に勧める書を一冊だけを残した。

焚書坑　焚書坑（ふんしょこう）　章碣（しょうけつ）

竹帛煙消帝業虚　竹帛（ちくきん）　煙消え　帝業（ていぎょう）虚なり
關河空鎖祖龍居　関河（かんが）　空しく鎖ざす　祖龍（そりゅう）の居
坑灰未冷山東亂　坑灰（こうかい）　未だ冷えざるに　山東乱る
劉項元來不讀書　劉項（りゅうこう）　元来　書を読まず

【語釈】

○焚書坑…秦の始皇帝が儒教の書物を焼き捨てた穴。○竹帛…竹や帛の書籍。○銷…消に同じ。○帝業…秦の始皇帝による天下統一の事業。○関河…函谷関と黄河。○祖竜…秦の始皇帝。○居…始皇帝のいた咸陽の宮殿を指す。○坑灰…坑の中で焼いた書物の灰。○山東…函谷関の東方。○劉項…劉邦と項羽。

赤壁　赤壁（せきへき）　杜牧（とぼく）

折戟沈沙鐵半銷　折戟（せつげき）　沙に沈んで　鉄　半ば銷（しょう）す
自將磨洗認前朝　自ら磨洗（ません）を将（も）って前朝を認む
東風不與周郎便　東風　周郎の与（ため）に便ぜずんば
銅雀春深鎖二喬　銅雀　春深くして二喬（きょう）を鎖（とざ）ささん

【語釈】

○赤壁…今の湖北省咸寧市赤壁市にある古戦場、呉の孫権と蜀の劉備の連合軍が、魏の曹操の軍を打ち破った所。○折戟…折れたほこ。○銷…錆びて朽ち果てる。○磨洗…洗い磨くこと○。前朝…前の時代。赤壁の戦いのあった三国時代。○周郎…呉の名将、周瑜のこと。○便…都合良くする。○銅雀…曹操が鄴（今の河北省臨漳県）に築いた台の名、銅雀台。○二喬…呉の喬氏の美人姉妹。姉の大喬は孫策が、妹の小喬は周瑜が側室とした

秦淮　秦淮（しんわい）　杜牧（とぼく）

煙籠寒水月籠沙　煙は寒水を籠（こ）め　月は沙（すな）を籠む
夜泊秦淮近酒家　夜　秦淮（しんわい）に泊して　酒家に近し
商女不知亡國恨　商女（しょうじょ）は知らず　亡国の恨み
隔江猶唱後庭花　江を隔てて　猶お唱（うた）う　後庭花（こうていか）

【語釈】
○秦淮…建康（南京）を貫流して長江へ注ぐ古代の運河。○煙…霞は靄。○寒水…寒々とした冬の川。○籠…月光が河の砂に射している。○籠…つつみこむ。○沙…砂州。○酒家…酒屋、飲み屋。○商女…妓女。○亡國恨…嘗てここに都を構えていた南朝の陳の後主が酒色に耽り、国を亡ぼしたという。○後庭花…後庭花…『玉樹後庭花』。南朝の陳の後主が作った詩。

漢宮詞（かんきゅうし）　李商隠（りしょういん）

青雀西飛竟未迴　青雀　西に飛んで竟（つい）に未だ迴らず
君王長在集靈臺　君王　長く　集霊台（しゅうれいだい）に在り
侍臣最有相如渴　侍臣　最も相如が渇き有れども
不賜金莖露一杯　金茎の露一杯を賜（たま）わらず

【語釈】
○青雀…西王母から漢の武帝に遣わされたという青鳥（『漢武故事』）。○君王…武帝。○集靈臺…武帝が西王母を迎えるために建てた宮殿。○相如…司馬相如、口が渇く病があった。○金莖…不老長寿の露を受けるために作った承露盤を支える金の柱。

賈生　賈生（かせい）　李商隱（りしょういん）

宣室求賢訪逐臣　宣室（せんしつ）賢を求め　逐臣（ちくしん）を訪う
賈生才調更無倫　賈生（かせい）が才調（さいちょう）　更に倫（りん）無し
可憐夜半虚前席　憐む可し　夜半　虚（むなし）しく席を前（すす）め
不問蒼生問鬼神　蒼生（そうせい）を問わず　鬼神を問う

【語釈】
○賈生…漢の賈誼、文帝の時、一旦左遷されたが呼び戻され、文帝が鬼神のことを問うと、その答えが上意にかなうものだったため、末子の梁懐王劉揖の太傅となった。○宣室…文帝の使者。○逐臣…左遷された人、賈誼。○才調…文才。○無倫…並外れている。○前席…一所懸命に聞く。○蒼生…人民。

集靈臺　集霊台（しゅうれいだい）　張祜（ちょうこ）

虢國夫人承主恩　虢國夫人（かくこく）　主恩を承（う）く
平明騎馬入宮門　平明　馬に騎して　宮門に入る
却嫌脂粉汚顔色　却って嫌う　脂粉の顔色を汚（けが）すを
淡掃蛾眉朝至尊　淡く　蛾眉（がび）を掃（はら）いて　至尊（しそん）に朝す

【語釈】
○集靈臺…玄宗が作った台、長生殿にあった。○虢國夫人…楊貴妃の姉。○承主恩…玄宗の寵愛を受けた。○平明…夜明け。○脂粉汚顔色…素顔が美しいので化粧を嫌う。○蛾眉…美しい眉。○至尊…天子。

游嘉陵後溪

山屐經過滿徑蹤
隔溪遙見夕陽舂
當時諸葛成何事
只合終身作臥龍

嘉陵の後溪に游ぶ

薛能

山屐 経過す 満経の蹤
溪を隔てて 遙かに見る 夕陽の舂ずくを
当時の諸葛は 何事か成せし
只だ 合に 終身 臥龍と作るべきに

【語釈】

○嘉陵…陝西省寶雞市嘉陵江、諸葛孔明が出師したところ。○山屐…木屐、下駄に歯のあるもの。○舂…夕陽が沈むさま。○諸葛…諸葛亮孔明。○臥龍…出廬前の孔明は臥龍と呼ばれた。

前對

山店　山店

盧綸

登登山路何時盡　登々として山路　何れの時にか尽きん
決決溪泉到處聞　決々として溪泉　到る処に聞く
風動葉聲山犬吠　風は葉声を動かして　山犬吠ゆ
一家松火隔秋雲　一家の松火　秋雲を隔つ

【語釈】
○山店…山の茶店。○登登…どんどん山を登っていくこと。○決決…水がさらさら流れる音の形容。○松の木を燃やした灯火。

韋處士郊居　韋処士の郊居

雍陶

滿庭詩景飄紅葉　庭に満つる詩景　紅葉　飄えり
繞砌琴聲滴暗泉　砌を繞ぐる琴声　暗泉　滴る
門外晚晴秋色老　門外の晩晴　秋色老ゆ
蕭條寒玉一溪煙　蕭条たる寒玉　一溪の煙

【語釈】
○韋處士…不祥。處士は官吏にならない人。○詩景…詩に書くような景色。○暗泉…目に見えない泉。○秋色…秋景色、秋の気配。○蕭條…もの静かなさま。○寒玉…竹。○煙…水煙。

江南　江南　陸龜蒙

村邊紫豆花垂次　村辺の紫豆　花垂るる次いで
岸上紅梨葉戰初　岸上の紅梨　葉戦ぐの初
莫怪煙中重回首　怪しむ莫かれ　煙中　重ねて首を回らすを
酒旗青紵一行書　酒旗の青紵　一行の書

【語釈】
○江南…長江下流の南岸地方。○紫豆…紫色の豆の花。○次…時節。○煙中…霞の中。○酒旗…酒屋の目印の旗。○青紵…青い麻で出来た布。

旅夕　旅夕　高蟾

風散古陂驚宿鴈　風は　古陂に散じて　宿鴈を驚かし
月臨荒戍起啼鴉　月は　荒戍に臨みて　啼鴉を起たす
不堪吟斷無人見　吟断して　人の見る無きに堪えず
時復寒燈落一花　時に復た寒燈　一花を落とす

○古陂…古い堤。○宿鴈…宿っている鴈。○荒戍…荒れた守備兵の宿衛。○吟斷…吟じ終わる。○寒燈…寒々とした灯火。○一花…花の形になった灯火の燃えかす。丁字頭。吉祥と言われる。

金陵晩望　金陵の晩望

高蟾

曾伴浮雲歸晩色　曽て浮雲の晩色に帰するに伴い
猶陪落日泛秋聲　猶お落日の秋声を泛ぶに陪す
世間無限丹青手　世間限り無き丹青の手
一段傷心畫不成　一段の傷心画がけども成らず

【語釈】
○金陵…南京、六朝の都。○晩眺…夕暮れの眺め。○晩色…夕方の眺め、夕靄。○伴…傍にいる、実際にながめる。○秋聲…秋の気配を感じさせる音。○陪…傍にいる、実際にながめる。○丹青…絵。○傷心…胸を痛める気持。○一段…一片。

春

高蟾

明月斷魂清靄靄　明月断魂清くして靄々
平蕪歸路綠迢迢　平蕪帰路緑にして迢々
人生莫遣頭如雪　人生頭を雪の如からしむる莫かれ
縱得春風亦不消　縱い春風を得るも亦消えず

【語釈】
○斷魂…非常に悲痛である。○靄靄…おぼろげなさま。○平蕪…平らな草原。○迢迢…高いさま、遙かなさま。

後對

過鄭山人所居　鄭山人の所居に過ぎる

劉長卿

寂寂孤鶯啼杏園　寂々として孤鶯杏園に啼き
寥寥一犬吠桃源　寥寥として一犬桃源に吠ゆ
落花芳草無尋處　落花芳草尋ぬるに処無し
萬壑千峰獨閉門　万壑千峰独り門を閉ざす

【語釈】
○過…立ち寄る。鄭山人…未詳、山に住んでいる鄭氏。○所居…住まい。○寂寂…ひっそりしているさま。○桃源…桃源郷のような所。○万壑千峰…多くの谷と峰。○閉門…門をしめる、世間との交際を絶ったとえ。

寒食汜上　寒食汜上

王維

廣武城邊逢暮春　広武城辺暮春に逢い
汶陽歸客淚沾巾　汶陽の帰客涙巾を沾おす
落花寂寂啼山鳥　落花寂々山に啼く鳥
楊柳青青渡水人　楊柳青々水を渡る人

【語釈】
○寒食…冬至から百五日目にあたる日。○汜上…汜水の（河南省にある川の名）ほとり。○広武城…古城名、河南省滎陽の東北の廣武山上に東西二箇所ある。○汶陽…山東省寧陽県地方。○帰客…帰ってきた旅人（作者）。沾…ぬれる。○巾…ハンカチ状の布。寂寂…もの寂しいさま。ひっそりとしたさま。○青青…青々とした。

與從弟瑾同下第後出關　　從弟と同じく下第して関を出ず

盧綸

出關愁暮一沾裳　　関を出て暮を愁い　一に裳を沾す

滿野蓬生古戰場　　満野　蓬は生す　古戦場

孤村樹色昏殘雨　　孤村の樹色　残雨に昏らく

遠寺鐘聲帶夕陽　　遠寺の鐘声　夕陽を帯ぶ

【語釈】

○従弟…（自分より年下の男の）いとこ。○瑾…いとこの名。同…（…と）いっしょに。○下第…科挙の郷試落第する。○出関…関中（…現・陝西省中部で、四つの関の中の地。中心は都の長安）の地より出る。○言別…別れの言葉を告げる。愁暮…日が暮れたことを愁える。○一…もっぱら。○裳…衣服。蓬…ヨモギ。○孤村…ぽつんと離れたところにある村。○昏…（日が暮れて）くらい。○残雨…残り雨。

宿石邑山中　　石邑山中に宿す　　韓翃

浮雲不共此山齊　　浮雲　此の山と斉しからず
山靄蒼蒼望轉迷　　山靄　蒼々として　望み転た迷う
曉月暫飛千樹裏　　曉月　暫らく飛ぶ　千樹の裏
秋河隔在數峰西　　秋河　隔てて在り　数峰の西

【語釈】
○石邑山…今の河北省石家荘市鹿泉区にある山。○山靄…山にかかる靄。蒼蒼…深い青さ。○転…いよいよ。ますます。○不～斉…等しくない、浮き雲が石邑山ほど高くないということ。○暫飛…にわかに飛ぶように移ってゆく。○秋河…秋の銀河。（唐詩選）

贈張千牛　　張千牛に贈る　　韓翃

蓬萊闕下是天家　　蓬萊闕下　是れ天家
上路新回白鼻騧　　上路　新たに回る白鼻騧
急管晝催平樂酒　　急管　昼に催がす　平楽の酒
春衣夜宿杜陵花　　春衣　夜に　宿る　杜陵の花

【語釈】
○張千牛…不祥。○蓬萊闕下…仙人の居所。○上路…天子の通路。○白鼻騧…浅黄色の名馬。○急管…音調の急な笛の音。○平樂…平樂館、倶楽部の一つ。○春衣…春の衣服、張千牛のこと。○杜陵花…妓女のこと。

拗体

旅望

百花原頭望京師
黄河水流無盡時
秋天曠野行人絶
馬首西來知是誰

旅望

李頎（りき）

百花原頭（ひゃくかげんとう） 京師（けいし）を望めば
黄河 水流れて 尽くる時無し
秋天 広野 行人 絶ゆ
馬首 西來するは 知んぬ是れ誰そ

【語釈】
○百花原（不祥）のほとり。○京師…長安。○西來…西に向かってやってくる。

滁州西澗

韋應物

獨憐幽草澗邊生
上有黄鸝深樹鳴
春潮帶雨晚來急
野渡無人舟自横

滁州（ちょうしゅう）の西澗（せいかん）

独り憐れむ 幽草の澗辺（かんぺん）に生ずるを
上に黄鸝（こうり）の深樹に鳴く有り
春潮 雨を帯びて 晩来旧なり
野渡 人無く 舟 自（おのずか）ら横わる

【語釈】
○滁州…安徽省滁市。○西澗…西側の谷川。○幽草…奥深い谷に生ずる草。○澗邊…谷川の岸辺。○黄鸝…コウライウグイス。○春潮…春の日のうしお。○晩來：夕暮れになってから。○野渡…田舎の舟渡し場。郊外の渡し場。

酬張繼　張継に酬ゆ　皇甫冉

悵望南徐登北固　南徐を悵望し　北固に登る
迢遙西塞限東關　迢遙たる西塞　東関を限る
落日臨川問音信　落日　川に臨み　音信を問えば
寒潮唯帶夕陽還　寒潮は　唯だ　夕陽をびて還る

【語釈】
○張繼…中国、盛唐の詩人。官は検校祠部員外郎。「楓橋夜泊」の詩で知られる。南徐…江蘇省鎮江市。○北固…江蘇省鎮江市にある山。○迢遙…はるかなさま。○西塞…浙江省湖州市の西南にある山。○東關…安徽省含山県の西南、三国時代の呉の諸葛恪が住んだところ。

河邊枯木　河辺の枯木　長孫佐輔

野火燒枝水洗根　野火　枝を焼いて　水　根を洗う
數圍枯朽半心存　数囲　枯朽して　半心存す
應是無機承雨露　応に　是れ　機の雨露を承ること　無かるべし
却將春色寄苔痕　却って　春色を将って　苔痕に寄す

【語釈】
○枯朽…枯れ朽ちる。○機…活動の根源。○承…恩恵にあずかる。○春色…春の気配。○苔痕…苔の痕。

柳州二月　　柳州の二月　　柳宗元

宦情羈思共悽悽　　宦情　羈思　共に悽々

春半如秋意轉迷　　春半ばにして　秋の如く　意　転た迷う

山城過雨百花盡　　山城　雨過ぎて　百花尽き

榕葉滿庭鶯亂啼　　榕葉　庭に満ち　鶯　乱れ啼く

【語釈】

○柳州…広西壮族自治区の柳州市。○宦情…役人としての思い、念願、願望。○羈思…旅のうれい。○淒淒…わびしく悲しいさま。○転…ますます。○山城…山あいの町、柳州を指す。○榕葉…榕樹の葉。

贈楊煉師　　楊煉師に贈る　　鮑溶

道士夜誦藥珠經　　道士　夜誦す　薬珠経

白鶴下遶香煙聽　　白鶴下り　香煙を遶って聽く

夜深經盡人上鶴　　夜深け　経尽きて　人　鶴に上る

仙風吹入秋冥冥　　仙風　吹き　秋の冥々たるに入る

【語釈】

○楊煉師…不祥。煉師は戦術を学ぶ者への尊称。○藥珠經…黄帝の説くところと称する黄帝教、道教の最も重要な経典の一つ。○仙風…神仙界のような風。天風。○冥冥…奥深いさま。

題齊安城樓　　杜牧

鳴軋江樓角一聲
微陽瀲瀲落寒汀
不用憑闌苦回首
故郷七十五長亭

斉安の城楼に題す

鳴軋たり　江楼の角　一声
微陽　瀲々として　寒汀に落つ
用いず　闌に憑りて　苦　に首を回らすを
故郷　七十五長亭

【語釈】

○斉安城…広東省恩平市)。○鳴軋…悲しみに泣くような声。○江楼…川に面した高殿。○角…角笛。○微陽…かすかな日の光。○瀲瀲…水が日の光できらめくさま。○寒汀…寒々とした渚。○落…ここでは照らすの意。○憑欄…欄干にもたれかかる。○苦…ねんごろ、ねんいり。○廻首…顔を向ける。○故郷…住むべき所、長安。○長亭…十里毎にある宿場、七十五長亭は、七百五十里。(漢詩大系　１４)

側體

營州歌　栄州歌

高適

營州少年愛原野　栄州の少年　原野を愛し
狐裘蒙茸獵城下　狐裘　蒙茸　城下に猟す
虜酒千鍾不醉人　虜酒　千鍾　人を酔わしめず
胡兒十歳能騎馬　胡兒　十歳　能く馬に騎す

【語釈】
○營州…遼寧省朝陽市朝陽県。○狐裘蒙茸…狐の皮で作ったかわごろもが乱れるさま。○虜酒…北方の異民族の酒。○千鍾量の多いことの喩え。百杯千杯。

山家　山家

長孫佐輔

獨訪山家歇還渉　独り　山家を訪ね　歇みて還た渉る
茅屋斜連隔松葉　茅屋　斜めに連なり　松葉を隔つ
主人聞語未開門　主人　語を聞けども　未だ門を開かず
繞籬野菜飛黄蝶　籬を繞る野菜　黄蝶　飛ぶ

【語釈】
○茅屋…茅ぶきの家。

夏晝偶作　夏昼偶作（かちゅうぐうさく）

柳宗元（りゅうそうげん）

南州溽暑醉如酒　南州の溽暑（じょくしょ）　酔うこと酒の如し
隱几熟眠開北牖　几に隠って熟眠し北牖（ほくゆう）を開く
日午獨覺無餘聲　日午　独り覚めて　余声　無し
山童隔竹敲茶臼　山童　竹を隔だてて　茶臼を敲く

【語釈】
○夏晝偶作…夏の昼に、たまたま作った詩。○南州…南国の永州、作者が左遷された先の地。○溽暑…蒸し暑いこと。○酔如酒…（暑熱による）酔いのさまは、酒に酔ったかの如くである。○隱…よりかかる。几…机。○熟眠…熟睡。○北牖…北側のれんじ窓。○日午…正午。○独覚…ひとり目覚める。○茶臼…茶の葉をひいて抹茶にするのに用いるひき臼。

歩虛詞　歩虛詞（ほきょし）

高駢（こうべん）

青溪道士人不識　青溪（せいけい）の道士　人　識らず
上天下天鶴一隻　天に上り天より下る　鶴　一隻（せき）
洞門深鎖碧窗寒　洞門　深く鎖ざして　碧窓（へきそう）寒し
滴露研朱點周易　露を滴（したた）らして　朱を研（みが）き　周易（しゅうえき）を点す

【語釈】
○歩虛詞…楽府雑曲歌詞の一つ、神仙の縹渺軽挙の美を歌う。○洞門…洞穴の住居に設けた門。○周易…経書の一つ。○點…調べる。

君山　君山（くんざん）　君山父老（くんざんふろう）

湘中老人讀黄老　湘中（しょうちゅう）の老人　黄老（こうろう）を読む
手援紫藟坐碧草　手に　紫藟（しるい）を援（と）って　碧草に坐す
春至不知湖水深　春至り　湖水の深きを知らず
日暮忘却巴陵道　日暮　忘却す　巴陵の道

【語釈】
○君山…洞庭湖にある山。○湘中老人…作者（正体不祥）のこと。○黄老…『老子』。○紫藟…ふじかずら。○碧草…緑の草。○巴陵…湖南省岳陽県。

繡嶺宮（しゅうれいきゅう）　李洞（りどう）

春草萋萋春水綠　春草　萋々（せいせい）として　春水緑なり
野棠開盡飄香玉　野棠（やどう）　開き尽くして　香玉（こうぎょく）を　飄（ひるがえ）す
繡嶺宮前鶴髮翁　繡嶺宮前（しゅうれいきゅうぜん）　鶴髮（かくはつ）の翁
猶唱開元太平曲　猶（な）お唱（うた）う　開元　太平の曲

【語釈】
○繡嶺宮…河南省陝県にあった唐の高宗が作った宮殿。○萋萋…草木の盛んに茂るさま。○野棠…野生の海棠。○香玉…野棠の花の形容。○鶴髮…白髮頭。○開元太平曲…玄宗が開元年間にこの地に御幸して作った曲。